

横穴式石室の前庭について

その起源と系譜

On the Frontal Platform of Corridor-Style Stone Chambers

加部二生

はじめに

- ①前庭の定義
- ②前庭研究史
- ③前庭の起源と系譜
- ④前庭の分布
- ⑤横穴式石室への影響
- ⑥前庭の機能

【論文要旨】

群馬県内の終末期古墳では普遍的に存在する、横穴式石室の前面に広がる前庭構造について、従来は、古墳時代後期に群馬県地域で独自に土着した構造であると解釈されていた。しかし、近年の研究では、全国各地に所在することが明らかとなり、その起源については、古墳時代前期に高句麗地域で成立していることが明確に解ってきた。

高句麗では、前庭構造が王陵に採用され、渤海に取って変わった8世紀終末まで連綿と構築されている。一方で、北部九州地方に導入された初期の横穴式石室にも前庭が付されたものがあり、前庭を持つ古墳は、百済、新羅、伽耶地域では認められないことから、これら初期横穴式石室の構築は高句麗の影響化に成立していることが明らかになった。

横穴式石室の浸透に伴って前庭が日本各地に拡散していくにもかかわらず、これらを頑なに拒み続けているのが畿内中枢部の大和地域である。おそらく、当時の畿内大和勢力は、外交をはじめとして百済との結び付きを重視しており、こうした状況は、敵対する高句麗との間に一線を画していた結果を反映していると推定される。これに対して、九州で受容された前庭は、その「ハ」の字形に開いた形状が横穴式石室の羨道部の形態に影響を及ぼし、変質を遂げた形で日本各地へと拡散していく。また6世紀代になって美濃、上野周辺地域には九州とは別系譜で導入されると見られ、定着して墓制の主流となっている。埴輪祭祀が終焉した7世紀代の上野地域では、3000基以上の古墳に前庭が構築され、墓前祭祀が営まれていたと考えられる。これらに関与した造墓集団は後に、東国経営に関連して、東北地方へと赴き、任地で古墳が消滅するまで同様の墓造りに勤しんだものと思われる。

はじめに

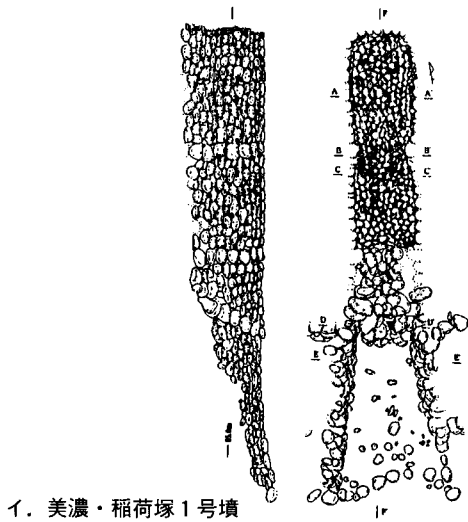
群馬県の終末期古墳では普遍的に存在する、横穴式石室の前面に広がる前庭については、従来、古墳時代後期に群馬県（旧上野国）地域で独自に土着した構造であるとされていた⁽¹⁾。ところが、近年のように研究が進んで他地域との連携が広がる中で、全国各地にあることが明確に解ってきた⁽²⁾。また、日本に横穴式石室をもたらした朝鮮半島においても確認されており、その系譜関係については、確定的なものとなり、古墳時代前期にすでに成立していることが明らかとなった。しかし、まだ日本国内においても、これらの構造について、用語の混乱が見られるのが現状であり、調査されてもいまだ認知されずにいる地域があることは否めない。今回、これらを整理することにより、その系譜関係を明らかにすると共に、葬制伝播の一過程を考察し、延いては古墳時代における社会構造の一端を垣間見ることができればと考えている。

①……………前庭の定義

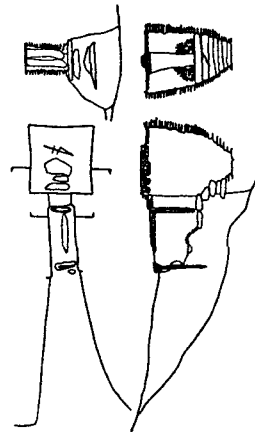
(1)前庭の定義

前庭についての学史を顧みた時、最もまとまった基本文献として松本浩一⁽³⁾（1976）による論考を忘れることはできない。同氏による前庭の定義では、「横穴式石室の入口前にひらけた三方を石組みで囲んだ一種の広場であり、そのプランは台形状を呈しているものが多い」とされている。さらに付け加えるとすれば、天井石は構築されないで、羨門部分で屈曲して広がりを持つものが多い。性格としては、主に、墓前祭を行うために設けられたものとされている⁽⁴⁾。しかし、この当時、日本国内では群馬県以外の前庭は著名でなかったため、松本浩一氏の研究対象も上野地域の調査例に限られていた。現在の研究からみると、他地域にみられる形態についての考慮がなされていないが、当時の研究事情ではやむを得ない状況といえる。その後、前庭についての議論はほとんどなされなかったため、現在に至っても用語として定着していない地域があることは否定できない。特に類似遺構として、墓道との相違については曖昧な部分も多々あり、付設する羨道部との境界を巡って、平面形状では区分できない折衷的な形態も確認されている。また、近年調査されている古墳の殆どは破壊が著しいものであり、天井石をはじめとした上半部の情報を欠いているものが多いために、これらの分別が困難な事例もある。いずれにしても、定義が曖昧であったことが用語を混乱に導いている最大の要因であることが指摘される。

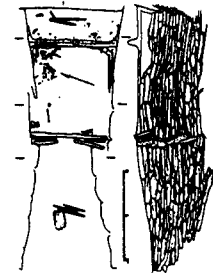
例えば、美濃地域周辺では石積があっても、南大塚古墳や稲荷塚1号墳のように羨門部分に全く屈曲をもたず、緩やかに開いていく形態もある。（fig. 1-イ）前庭部と羨道部の境界で側壁に縦もしくは斜めの仕切りあるいは目地をすることにより区画の意識を行うもので、天井石は構築されていない⁽⁵⁾。これらは松本浩一氏の定義には無かったもので、これらと同様の構造は高句麗地域でも認められている⁽⁶⁾。一方、岩橋千塚前山 A56号墳のように（fig. 1-ロ）、裾開きの形態であるが石を用いていないものもあり、これらは墓道として捉えたい。この部分に石積をもって天井石が構築されている例は、所謂「ハ」の字型羨道と呼ばれているもので（fig. 1-ハ）、志摩おじょか古墳例は天井石がほぼ全面に構築していたと考えられるのでこの類例として扱った。また筑前や伊賀地域で比



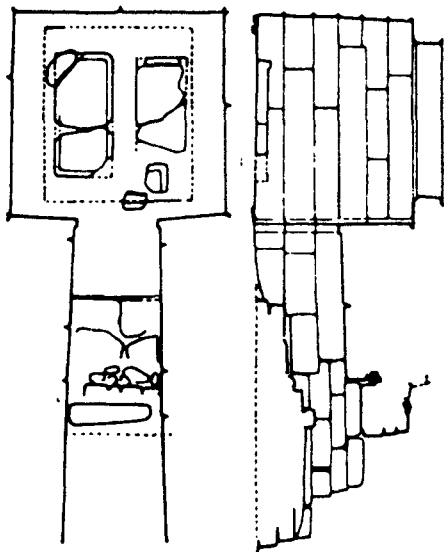
イ. 美濃・稲荷塚1号墳



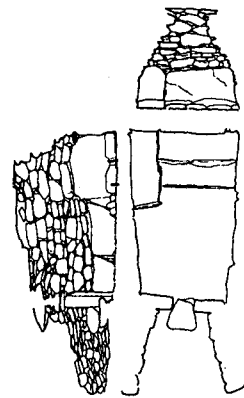
ロ. 紀伊・前山A56号墳



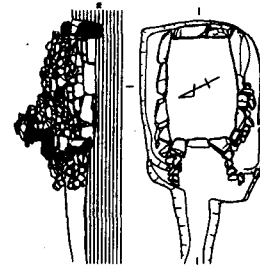
ハ. 志摩・おじょか古墳



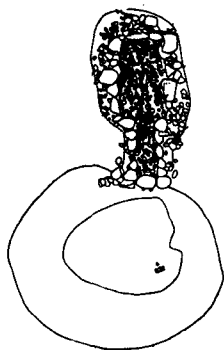
ニ. 高句麗・韓安將軍塚古墳



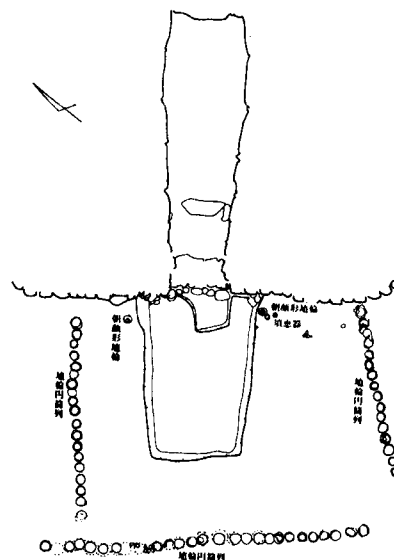
ホ. 筑後・関行丸古墳



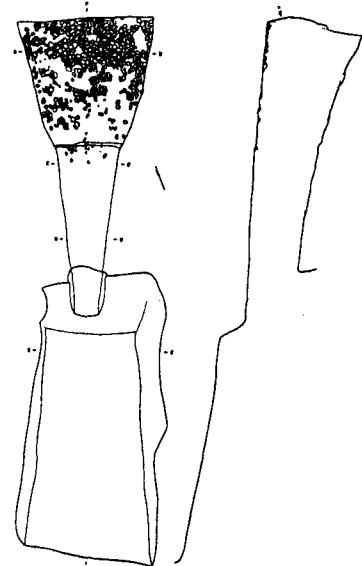
ヘ. 筑前・汐井掛16号墳



ト. 上野・上横俵M12号墳



チ. 上野・ニツ山1号墳



リ. 相模・代官山6号横穴墓

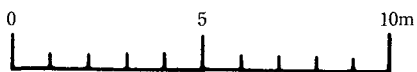


fig. 1 各地の前庭と類似遺構

較的多く認められている羨道部入口付近が裾開きの形態も該当する。問題なのは、「ハ」の字型羨道の途中で天井石が切れて無くなる事例で、先程の美濃例のような仕切りや目地といった区画の意識の無い例である。高句麗輯安將軍塚古墳例 (fig. 1-ニ) をはじめとして高句麗地域にはかなりの事例が確認されている。平面形態からは区別できず、区画の意識も無いことからこれらの事例については天井構架部は羨道、それ以外は墓道と捉えたい。このほか、北部九州地方に認められる羨道部を持たないで、玄室に直接前庭が付設される釜塚古墳、関行丸古墳などのタイプ (fig. 1-ホ) には、前庭の一部までは天井石をもつ例があり、これらを墓道あるいは羨道と呼んでいる事例もある。しかし、汐井掛16号墳例 (fig. 1-ヘ) のように前庭部の石組とは別に墓道をもつ例もあることから、これらについてはすべて前庭の範疇で認めたい。また、上野地域では、石組みを伴わないで、掘込みだけもつタイプ (fig. 1-ト) も前庭と呼ばれている。掘り込みだけの例も従来は、墓道と呼んでいるものと近似した形となっており、その区分が難解な事例も報告されている。

私見では、区画されて完結している例については前庭の一種と考えることに吝かでないが、新田町二ツ山1号墳例 (fig. 1-チ) のように横穴式石室前面部を円筒埴輪で区画して広場の部分を形成している事例も確認されており、これらを含めると遺構の形式学的な分類から、本来的な機能を損ねるおそれがある。ここでは松本浩一 (1976) の定義に従って、一応、石積もしくは石貼り、石敷のようなものを持っていることと、あきらかに広場としての使われ方が明確なものについてのみ前庭の名称を与え、石組の無いものについては除外したい。なお、この場合でも石室前面部分の呼称を前庭部と呼ぶことについては当然、差し障りない。ところで、横穴墓の入口前面部分にも前庭の用語が用いられているが (fig. 1-リ)、周知のとおり、これらの前庭部はいずれも石組みを伴わないものであることからここでは扱わなかった。

前庭の性格については、上野地域の調査例からすでに述べられているように、墓前祭祀を行う場所とされてきた。前庭から出土する遺物については古墳の築造年代を示すものではないことは古くから指摘されていた。これらの資料は墓前祭祀行為の下限を示すものであり、極端な例では古墳築造から200年くらいの時間差を経た事例も確認されている。⁽⁷⁾

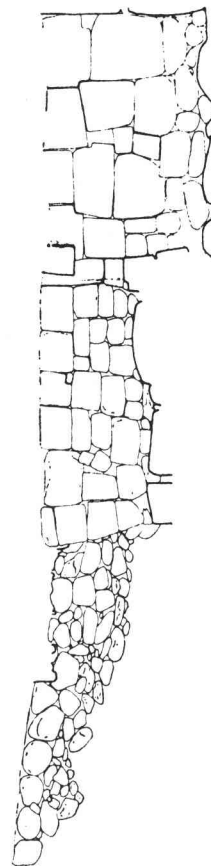
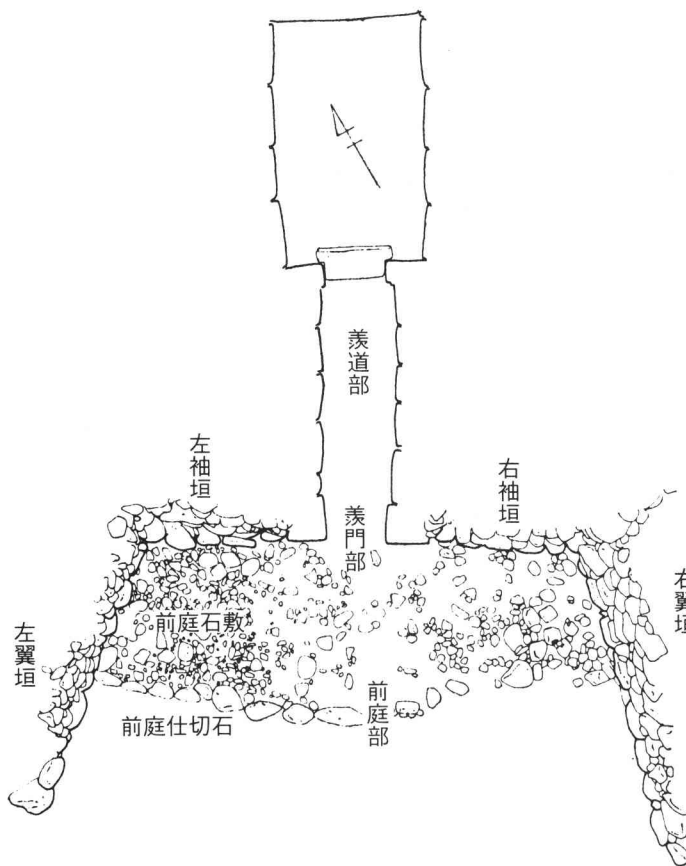
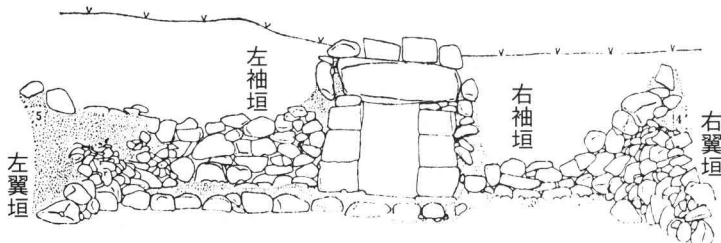
(2)各部の名称

前庭について説明する際に、各部の名称が定義付されていなかったことから混乱を招く一因となっていた。こうした観点を鑑みて、かつて建築史の専門家に御教示願ひ、それらの各部名称について論述したことがある。元来、横穴式石室の各部名称については、部屋としての構築物の一部に譬えて、建築学的な位置付けから名称が与えられていることは周知の通りである。故に、石室付属施設としての前庭部分についても同様であるべきと考えられる。建築学的名称として、門の両脇に広がる塀の部分は袖壁と呼ばれており、門に添えて連ねた垣根のことを袖垣 (そでがき) と呼んでいる。(fig. 2 参照) これら用例のうち、袖壁という語彙はむしろ、横穴式石室用材の積み方のような直立した壁を連想させる上に、石室袖部石材と混同するおそれもあり、用語としての煩雑差を考えると適当でない。⁽⁸⁾ 実際に前庭は殆どがやや傾斜を持った石垣状を呈しており、そのまま墳丘葺石に連なって移行していく事例もあることから、袖垣の妥当性を強調したい。⁽⁹⁾ 同様に台形の斜辺にあたる部分は翼状にひろがることから翼垣 (よくがき) と呼んでいる。⁽¹⁰⁾

袖垣の用法については、古典文学などでは、1248年9月の奥付をもつ藤原光俊選による『万代和



(註12文献より)



0 1 2m

fig. 2 前庭各部の名称

歌集』秋下の項に「心なき賤のしわざと見えぬかな朝顔咲ける柴の袖垣」という源有仁の和歌があり、『太平記』巻18「一宮御息所の事」では、「嵯峨の奥深草の里に松の袖垣隙あらはなるに蔦はい懸て池の姿もさびしく」という記述から、中世段階ではかなり一般的に用いられていたことが理解される (fig. 2 右上挿絵参照)。

一方、翼垣については一般的な用語では無いものの、「翼」は左右にはりだした後に屈曲している形状を意味している。例えば、宇治の平等院では同様の平面形をもつ建物を「翼廊」と呼んでおり、建物の右の翼などという用法が認められている。

ところで、横穴式石室の部分名称を説明する場合、片袖型石室などでは、玄室奥側から見る立場と、石室入口部から見る立場の二説があり、統一されていないのが現状である。前庭についても、これらをどちら側から見て右側かあるいは左側と呼ぶのか問題がある。前庭は機能的には古墳の外側からみて祭事を行うと考えられるので、石室羨門に向かって右側を、右袖垣、右翼垣と呼ぶことを提唱したい⁽¹³⁾。

(3)前庭の形態分類

前庭の形態については、尾崎喜左雄 (1964) で台形前庭と矩形前庭に分類されて以来、大きく2類型に分類されてきている。ここではこれまでの学史を踏まえて、前項で定義してきた前庭についての細分を試み、類型を整理してみたい⁽¹⁴⁾。なお、初期横穴式石室に見られる前庭には中間的な形態を示す事例も含まれているが、それらの分類には系譜的な繋がりも重視している⁽¹⁵⁾。

A 類 石室入口部の羨門部分で屈曲して広がりを持ち、左右に広がる。平面形が前庭の長さ(奥行き)よりも最大幅の方が大きい横長の台形状を呈すものが一般的であるが、一部に前庭の長さが最大幅を凌ぐ事例や平面形が平行四辺形を呈する事例も含めている。

A-1 類 前庭としてもっとも一般的な形態である。尾崎分類の台形前庭に相当する。

A-1-a 類 横長の台形状を呈する。もっとも一般的な形態。

A-1-b 類 形態的にはa類と同様であるが、袖垣と翼垣の角度が鈍角で大きく開く。

A-1-c 類 袖垣と翼垣の角度が左右で異なる。平面形は横長の不定形になる。

A-2 類 両翼垣がほぼ平行する。袖垣と翼垣の角度によりさらに細分される。

A-2-a 類 袖垣と翼垣が直交する。袖壁はほぼ直立する。

A-2-b 類 袖垣と翼垣の角度は任意であり、前庭部は平行四辺形を呈する。

A-3 類 翼垣の途中から屈曲して段をもつ。

A-4 類 平面形態は台形状を呈するものの、前庭の長さが最大幅に等しいか、やや凌駕する。羨道部分との境が不明瞭で墓道的な形態のものも含める。

A-5 類 明確な袖垣を持たない。曲線的に円弧を描いた翼垣を有する。あるいは直線的に外反する短い翼垣を持つ。

B 類 前庭石組が羨道壁の延長線上に築かれる。前庭の幅も羨道幅と大差ない。全く屈曲部をもたない場合は、前庭部と羨道部の境に側壁に縦もしくは斜めの仕切り、あるいは目地をすることにより、明らかに区画の意識が認められる。尾崎分類の矩形前庭に相当する。

B-1-a 類 羨道部から屈曲して短い袖垣をもつ。前庭部は縦長の台形を呈する場合が多い。

B-1-b 類 翼垣の角度が左右で異なり、平面形は縦長の不定形になる場合が多い。

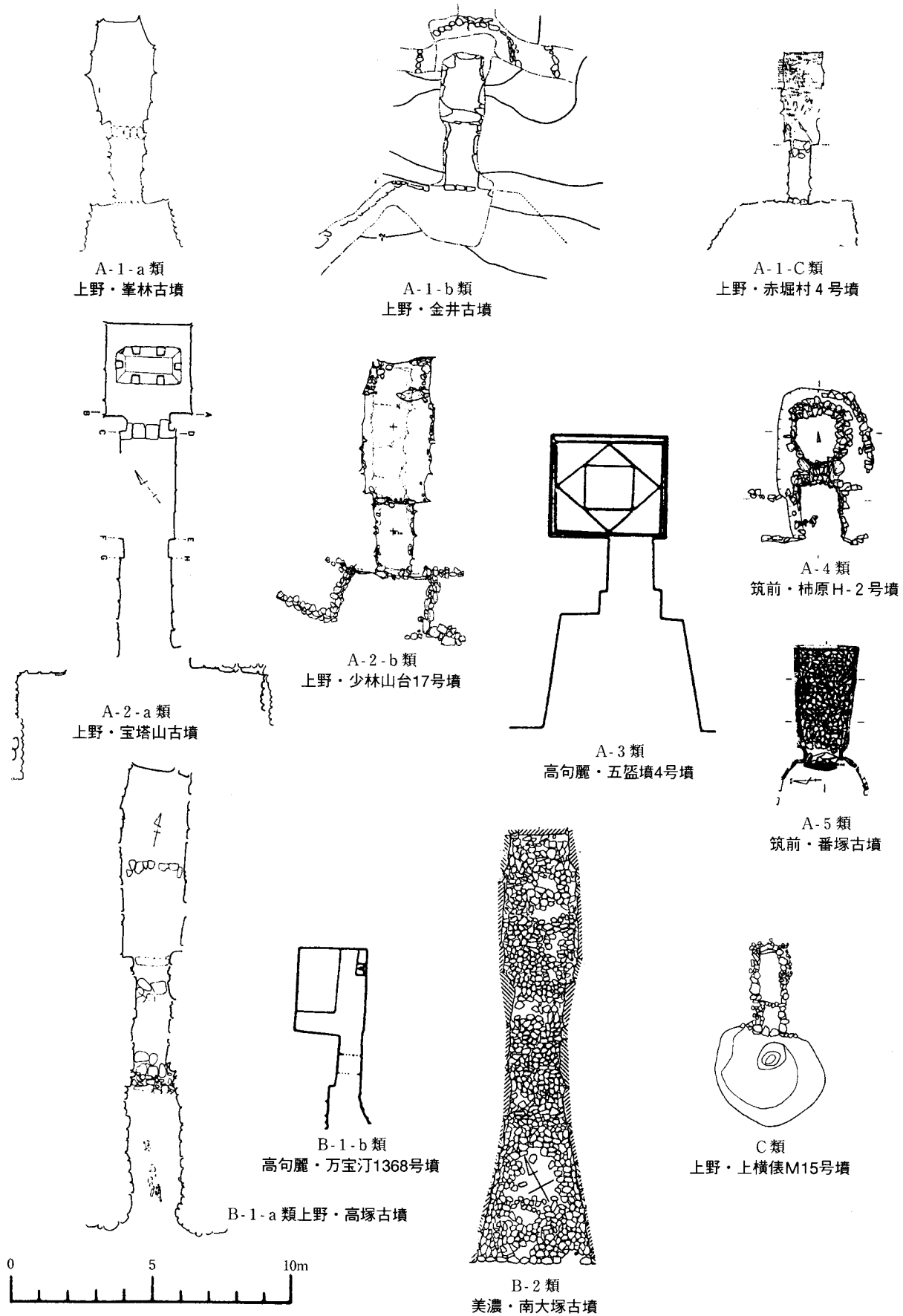


fig. 3 前庭の形態分類

B-2類 羨道部から屈曲せずに袖垣をもたない。前庭部と羨道部の接点は同じ幅で、次第に裾開きの形態を呈す。

C類 袖垣部分のみ石積みを持つ。前庭部分は掘り込みによって区画される。この場合、袖垣の定義は、羨門部の両側壁よりも左右に突出する石積みをもつことを条件とする。

このほか、前庭部全面に石敷を施す例、途中で仕切り石を設ける例、前庭の区画は通常にもっていて、さらにその中に掘り込みを持つ事例などが確認されているが、ここでは外形上の相違点を重視して、石組み部分の形態から分類をおこなった。⁽¹⁷⁾C類についても、定義で述べたとおり、本稿では除外して考えているが、分類項目としては設けておいた。少ない資料から見ても、高句麗にはAB両形態の前庭がすでに存在している。これらの年代的な時間軸が気掛かりであるが、近年の編年観では高句麗壁画古墳もかなり古く位置づけられており、A類前庭の出現は4世紀後半代に、B類前庭に至っては4世紀前半代には出現している。⁽¹⁸⁾日本ではB類前庭からA類前庭が登場してくると考えた研究者は多い。しかし、これらの説が成立しないことは、これまでに述べてきた内容だけでも充分察知することができよう。前庭の類型は高句麗地域ですでに殆どの形態が出揃って定型化しており、日本へはそれぞれ別系統で波及していることから理解できる。

②……………前庭研究史

「前庭」という名称を考古学史の中で探してみると、管見では1915年『朝鮮古跡図譜』第二冊の中で馬山面の漢王墓例で用いられている。⁽¹⁹⁾同書は関野貞・谷井済一・栗山俊一の三氏によって共著されたもので、それぞれの文責については明記されていないが、三氏ともに古建築が専門であることから、これらの用語も建築学的発想のものと考えられる。ただし、本例は実測図がないために詳細な検討の余地がない。文章中に「古墳墳丘外に延びる長方形の石列」と説明されていることから考えて、むしろ墓道の一種と解釈されるもので、本稿で意図する前庭とは厳密には異なるものと推定される。これを高橋健自博士が1924年に『古墳と上代文化』の中で、円墳の南方に「石を並べて前後に長い長方形の前庭がある。この石のならべてある部分は別に高くなっているのではなく、唯墳丘の正面に参道を作っただけである。」と引用されている。⁽²⁰⁾

一方、『朝鮮古跡図譜』の中では、高句麗の壁画古墳において、前庭が数基紹介されている。これらについての説明では特別な名称は無く、単に、羨道の延長、あるいは羨道に続く通路ぐらいの認識しかなかったようである。

戦後、群馬県下において精力的に古墳調査を行っていた尾崎喜左雄氏は1950年に粕川村壇塚古墳を発掘調査された際に前庭を「石室前特殊構造」あるいは「中壇」と呼称された。⁽²¹⁾壇塚古墳の場合は、前庭は石室を造り上げた後に、羨道部の入口を破壊除去して、前庭部の床面を構築している。1960年代ぐらいまでは発掘調査例自体が少なかったこともあって、10例程度が知られるのみで、尾崎喜左雄氏の述べられているように、特殊な構造とされていた。一方、南関東では横穴墓の調査例がかなり増加しており、1955年に菊地義次氏が「南部地方横穴墓」を紹介するにあたって「導入部」という用語をもちいており、1962年に再論されているときにも継承している。⁽²²⁾⁽²³⁾これに対して1967年に大川清氏が「切り通し」という用語をもちいて横穴墓の前庭部を説明している。⁽²⁴⁾

1964年に尾崎喜左雄博士は「横穴式古墳の基壇と所謂前庭」の中で、「前庭は付け基壇において横穴式石室の出入りの便を計って設けられたもので、横穴墓の前庭とは成因が異なり、且つ発展過程にも差がある⁽²⁵⁾」としている。特に、基壇面上に石室が構築されているものには前庭を欠くものが多いことを指摘しており、その中で蔵王塚、蛇穴山古墳は例外であるとしている。また前庭には矩形前庭（B類）と台形前庭（A類）の二種類があることを既に形態分類している。起源についても、「その祖型を大陸に求むべきか否かは、横穴式古墳が継受によるものである以上、積極的であるべきであり、大陸における存在を模したものであろう。」としており、畿内地方に調査例が無いことから「おそらく大陸で発生したものが畿内地方を飛び越えて直接関東地方へと持ち込まれた。」と推定している。その後、1966年に尾崎喜左雄博士は『横穴式古墳の研究』で石室前特殊構造について触れ、群馬県地域の前庭の中で古式なものは前庭構造を補設していることを指摘して、蔵王塚古墳、壇塚古墳、しどめ塚古墳などが古式な前庭であるとした。また、石室の羨道が長大化する傾向が認められる古墳は、これらへの過渡的現象であるとし、山の上古墳の事例を掲げている。さらに名称について学史に触れ、前庭は横穴墓の調査で先に用いられたものであるが、「横穴墓の前庭は掘削にあたって作業上の必要からまず設置され、それが出入りの便になって閉塞にも役立って行った⁽²⁶⁾」としており、古墳の前庭とは成因、発展過程ともに異なることを指摘されている。この点については1974年に坂詰秀一氏が『武蔵梵天山横穴墓』の中で述べている。同氏の報告は「前庭部」なので厳密には前庭と異なるかも知れないが、その用語について、「古代窯跡の焚き口外側のある空間に対して用いられており、墓と生産遺跡という全く性質の異なる遺構の部分名称として同じ表現の用語が定着してくるという現象は好ましくない」と苦言を呈している。さらに、横穴墓の羨門外側の限定された空間を表現する語としては先に述べた「導入部」、「切り通し」等の用語も用いられており、すべての研究者に「前庭」の用語が定着したものではないことを指摘して、「墓前域」の呼称を提唱した⁽²⁷⁾。しかし、一般的な横穴墓に見られるものは先に述べた通り、定義上「前庭」の範疇には入らないものであり、古墳の用語からすると「墓道」の範疇に該当すべきものであると考えられる⁽²⁸⁾。

1969年に甘粕健氏は「我孫子古墳群の編年的考察」⁽²⁹⁾の中で、調査された日立精機構内1号墳前庭部から出土した土器の年代は、墓前祭祀の継続期間の下限を示すものであることを考察されている。この中で1号墳はB類前庭を持つが、同じく前庭として扱っている2号墳については墓道として捉えるべきものである。

1971年に尾崎喜左雄博士は「墓前まつりを推定する」⁽³⁰⁾の中で、前庭の系譜については、尾崎(1964)に準じており、畿内地方には無いこと、名称の起源は南関東の横穴墓の調査例にあることを説明している。具体的な事例については、「もし大陸からの影響とすると、西日本には無さそうなので、直接関東地方に持ち込まれたものと言わざるを得ない」と尾崎喜左雄(1964)の内容を反復している。この中で重要な点は、前庭部分の床面からは多くの土師器、須恵器が出土し、金井古墳では火を炊いた痕跡が確認されている事を指摘している。そしてこれらの行為は、「みたまふり」のような反生を期待しているものとは異なり、むしろ「殯」に類似した行為であると前庭の性格付けについて論及されている。

その後、1970年代以降は発掘調査の急増に伴い、群馬県地域においては、前庭構造を持つ古墳は

終末期古墳の普遍的事例であることが明らかになってきた。こうした尾崎博士の研究は松本浩一氏によって継承され、石室平面企画論の一端を担っている。⁽³¹⁾ 1976年に発表された松本氏の提言は重要な問題を多く含んでおり、前庭の研究は本論によってほぼ体系を極めたといえる。ただ、惜しむらくは、構造論を重視して副葬品には一切触れていない点と、尾崎博士以来2分類されていた（筆者分類）AB類の存在を指摘しながらも、基本的な形態分類を一步踏み越えて、いきなり企画線の復元を骨子とする形式分類を発表されていることである。企画論についてはさまざまな問題点を抱えており、筆者は重視しない方針であるが、これらに対する筆者等の批判は別項に譲ることとする。⁽³²⁾

松本浩一氏は第一に前庭の定義を掲げ、横穴室石室の入口前に広がる、三方を石組みで囲った広場的空間として、天井石が構築されない部分とした。この際に、平面形が台形状を呈すものが多いことから、袖垣を上底、翼垣を斜辺と呼んだり側壁と呼んでいる。前庭を持つ古墳の石室の特徴として、すべて両袖型石室に限られること、玄門を持つ石室が多い点、胴張りプランを持つ石室もあること等を指摘している。前庭が群馬県内に出現する時期については、壇塚古墳、しどめ塚古墳、高塚古墳等における尾崎博士の補設例を支持し、これらの構築された時期を初源とした。特に「しどめ塚古墳と壇塚古墳は羨道壁を破壊してから前庭を構築しており、しどめ塚古墳の石室は当初、高麗尺で玄室と羨道20尺を構築し、その後、唐尺で羨道5尺分を延長して切石の羨門を付け足した」としている。⁽³³⁾ さらに「高麗尺から唐尺への変換は7世紀後半の中頃で、玄門の無い時期から出現する時期の過渡期にしどめ塚古墳の前庭が構築され、前庭を付け加えるために羨道部分を延長して先端に切石の羨門を追加している」と築造過程を説明されている。また、群馬県地域では玄門は切石とほぼ同一に山ノ上古墳の頃から出現しているとして、同墳の築造年代を山ノ上碑紀年銘から681年に比定した。そして、「しどめ塚古墳石室は当初、高麗尺使用であったが延長部分は唐尺により製作されていることから、石室は当初7世紀前半に構築され、周辺の奥原古墳群等の古墳に前庭がかなり設置されたのを見るにつけ基壇と共に前庭を付け足した」と尾崎博士直伝の構造論、尺度論、上野三碑年代観を駆使して実年代の比定まで行っている。⁽³⁴⁾ 前庭の機能については、「内部施設の延長で、石室の企画と一連の計画性があるものの、外部施設の一部をなしており、須恵器、土師器等の出土遺物が多量に出ることから、墓前祭的な祭祀を営んだ場所」としている。前庭の分布は、群馬県内では西毛地方に多いとされ、平野部よりもその周辺地域に多いとしている。県外では僅かではあるが、埼玉県、千葉県にも類例があることを指摘している。これらの起源について、（筆者分類の）A類はB類より発生したものではなく、7世紀中頃以降に截石積石室や玄門の付設などと共に伝播してきたものとして、高句麗高山里1号墳の存在から起源は朝鮮半島を想定されている。この指摘は全く正鵠を得たもので松本論文の中で最も高く評価される部分である。ただしその年代観については、7世紀前半の高山里1号墳に遅れることを強調して、上野における出現を7世紀中葉以降に限定している。群馬県内におけるA類の初源は、今のところ少林山台17号墳ほか数基で確認されている6世紀中葉と思われるが、当然、横穴式石室の導入と同時に入っていても不思議で無いことは今まで述べてきた通りである。現在の研究から見ると年代的に開きはあるものの、当時の研究レベル等を考慮すればやむを得ないと言えよう。しかし、こうした年代観の上限の指摘は、その後の研究に大きな規制を与え、近年までその影響力を及ぼした功罪もあることを忘れてはならない。このほか重要な指摘として、前庭の出現期で一部述べている前庭補設の問題である。特にB

類前庭において後補しているものが多いことを注意されている。松本浩一氏が「寄せ基壇」と呼ぶ、尾崎喜左雄（1964）で「附け基壇」と呼んでいた構造をもつ古墳では「前庭は石室入口が基壇によって塞がれた結果、石室への出入りの必要性から生じた」として、B類前庭は墓道的な性格から発生したことを想定されている。故に、これらに付設される前庭はすべてB類で、いずれも補設されていることを力説されている。二ツ山1号墳や業平塚古墳、高塚古墳等が同様の構造であることも指摘されているが、こうした構築方法は、近年のように古墳の墳丘断ち割り調査が進むにつれて群馬県内では一般的な古墳築造方法と理解されてきており、もちろんそれらにすべてB類前庭の付設が限定されるはずなどないし、それらがすべて補設された前庭を伴う保証もない。前庭の補設についても、確かに構築順序は松本浩一氏の指摘されているとおりの序列と思われるが、それらの間に時間差が介在するかどうかは出土遺物によって検証すべき問題と考えられる。この点については後に、大江正行氏によって出土遺物から実証されることになるが、決してこれらの事例が普遍的なものであるとは考え難い。この外、松本浩一氏は前庭の取り付け方についても分類を行っているがここでは省略する。⁽³⁷⁾

1976年に大和久震平氏は栃木県唐御所横穴墓の考察を行うに当たり、切石石室並びに前庭について述べている。⁽³⁸⁾ これらの中で、その系譜についても論及され、松本浩一氏の教示として、高句麗説を支持し、年代的にも松本説を用いている。7世紀前半代に位置づけているが、類例が僅かであることから躊躇していることは否めない。

1980年には『群馬県史』資料編3が刊行され、従来未発表資料であった多くの古墳が紹介された。この中で、筆者の翼垣部分については「袖壁」で統一されているようであるが、袖垣部分については各々の報告者が呼んでいる名称を重視した結果か、統一されていない。多くは、平面図における台形の形態を重視して上庭、あるいは奥面、奥の石組、奥の壁面等の呼称で説明されていた。

これらをまとめたのが第1表である。

1983年に土生田純之氏は「東大阪市イノラムキ古墳をめぐって」の中で、イノラムキ古墳石室構造の復原を行い、羨道入口部分がハの字形に開く前庭構造を想定されている。そして、畿内では前庭を有する古墳はほとんど無く、僅かに牽牛子塚古墳と本墳のみであるとしている。⁽³⁹⁾ 復原案の前庭形態は異形であり、牽牛子塚古墳についても詳細は不明である。ところで、土生田氏は墓尾3号墳については前庭と認めていないようだが偶然同書に掲載され、系譜的にイノラムキ古墳と繋がることを指摘されている。筆者は墓尾3号墳についてはB類前庭として問題ないと考えており、仮にイノラムキ古墳の羨道前端が「ハ」の字形に開く前庭とすると、類型は異なるがこの地域に2基の前庭が相次いで構築されたことになる。

1987年に加部二生は「横穴式石室の前庭について—各部の建築学的名称について—」において前庭の各部

第1表 『群馬県史』にみる前庭の各部名称

執筆者	古墳名	出典頁	袖垣	翼垣
石川正之助	「宝塔山古墳」	93	奥の石組み	——
松本浩一	「堀越古墳」	115	奥面	袖壁
藤岡一雄	「山内出古墳」	148	上底・奥の壁面	袖壁
藤岡一雄	「御部入古墳」	162	——	袖壁
鬼形芳夫	「御部入5号墳」	179	——	袖壁
田島桂男	「峯林古墳」	309	——	袖壁
尾崎喜左雄	「しどめ古墳」	321	上底	——
山本良知	「清音3号墳」	625	上底	——
横沢克明	「赤堀村39号墳」	663	上底	袖壁

の名称について、建築学の専門家の意見を聞いて、羨門に続く両側を袖垣(そでがき)、そこから屈曲する部分を翼垣(よくがき)と呼んだ。また、前庭には大きく、平面形態から2タイプに分類できることを指摘して、それぞれ多く発見されている地域の特徴から「美濃形」、「上野形」と仮称した⁽⁴⁰⁾。1988年に出版された『西三河の横穴式石室』資料編では、東海地方三河地域の横穴式石室を集成する中で、羨道部と前庭部の区分が難しいA-4類前庭について取り上げている。同書では翼垣部を前庭側壁と呼称し、羨道は短くそのまま「八」の字状に開く前庭へと移行していくタイプが多く存在することが指摘されている。この中で土生田純之氏は「石室の系統」についてまとめており、「前庭の機能を祭祀をとり行う場所と考えるならば八字形に広がった方が適している」として、B類前庭からA類前庭へと変遷することを想定されている⁽⁴¹⁾。

1989年に右島和夫氏は「東国における埴輪樹立の展開とその消滅」の中で、前庭を平面形態が台形もしくは横長の長方形を呈する7世紀型の前庭と、縦長の長方形を呈し、墓道としての側面が強い6世紀型の前庭に分類している。そして、しどめ塚古墳のように後補で増設された事例を除いて一般的には埴輪と前庭は競合しないとして、7世紀型の前庭は7世紀第2四半期ないし中葉以降に属するとしている⁽⁴²⁾。また、松本浩一(1976)における前庭を付設する古墳は截石切組積横穴式石室やこれに準ずる特定のものに限定されるという理解や、鬼頭清明(1989)における上野地域の中でも特定の集団に関わって付設されたという理解を批判して、前庭は埴輪消滅期以降の古墳には普遍的に存在することを指摘している。これらの指摘については正鵠を得たものであるが、すでに述べてきたように、A類前庭は日本列島における横穴式石室の受容とほぼ同時に付設されているのであり、右島氏の言うような時間軸を限定することはもちろんできない⁽⁴³⁾。

1990年に大江正行氏は『本郷の場古墳群』の中で、前庭は群馬県地域に独特な石室前特殊構造で、「石室前の広場的空間は横穴墓のそれと類似するが、(中略)横穴墓の前庭とは切り離して考えられている。」と尾崎博士以下の見解を踏襲されている⁽⁴⁴⁾。この中で注目されるのは、前庭の調査状況の記録写真から、的場D号墳の前庭設置時期は葺石設置よりも遅いことを指摘し、前庭出土の須恵器と裏込めから出土した須恵器の接合関係から、8世紀初頭頃になって前庭が付け加えられたことを推定している。この報告はすでに尾崎喜左雄(1964)・松本浩一(1976)ほかで述べられていた、高塚古墳、しどめ塚古墳、壇塚古墳等における後補による前庭製作を遺物面から実証したもので重要である。近年調査された、五目牛稻荷山古墳では、前庭を作り直している事例が確認されている。追葬あるいは、墓前祭祀の段階で再構築されている事例も含まれている可能性は高く⁽⁴⁵⁾、時期決定にあたっては注意を要する警鐘を発している。

1992年に上野恵司氏は群馬県内の切石積石室を扱う中で、前庭なし→前庭B類→前庭A類という変遷を想定している⁽⁴⁶⁾。しかし、これらが系譜的に異なった流れをしていることは先にのべた通りであり、むしろ日本列島ではA類前庭の出現が先行していることも以前に指摘した通りである。同年には、土生田純之氏が「横穴系の埋葬施設」の中で、前庭(部)は石室と一体のものとして構築されているのを特徴とするのに対して、墓道は構造上、石室や墳丘とは切り離されるべきものとしてその相違点を墳丘構築過程から説明されている⁽⁴⁷⁾。また熊本県井寺古墳などの前庭部の一部まで天井石が構築される事例も前庭(部)と認めた上で、これらの石組(翼垣部に相当か?)を前庭側壁と呼称し、墓前での儀礼実修の場としている。

1994年には1988年に出版された続編ともいえるべき『東三河の横穴式石室』資料編が上梓された。⁽⁴⁸⁾同書ではB類前庭を、石組の長い前庭として取り上げている。1995年に東潮氏は、高句麗地域に認められるA類前庭を「コ」の字状に開く墓道と捉え、その特徴から高山里型石室を提唱している。注目されるのは、これらの石室をもつ古墳は、平行・三角持送り式天井を有し、四神図、装飾文を主体とする段階の壁画古墳が多いことを指摘している。そしてこれらの石室の被葬者は上位五等以上の官人層の墓であるとしている。⁽⁴⁹⁾1996年に牛丸岳彦氏は「乙塚古墳と段尻塚古墳について」の中で、前庭の定義を基本的には天井石が構築しない部分で、羨道部との境界部分に屈曲の認められるものとし、屈曲の無い場合は、側壁に縦もしくは斜めの目地を施して明らかに区画の意図が認められるものとした。⁽⁵⁰⁾そして、美濃地域には前庭が20例程認められ、時期的には6世紀後半から7世紀初頭にかけてのもので、古墳群中の規模の大きい古墳に採用されていることを指摘している。また、前庭部は墓前祭祀の場所だけでなく、装飾的な意味合いもあり、その在り方の検討を痛感している。当該地域の前庭は大きく3分類され、本稿における分類基準と照合するとB-2類は美濃東部に、B-1-a類はほぼ美濃全域に、A-5類は河原石積石室に特有であるとしている。

1997年に加部二生は「群馬県内出土の蝦夷関連遺物」の中で、東北地方に集中して認められる前庭について上野の影響によるものと考え、これらの造墓に拘わった集団は上野地域から移住してきた可能性を示唆した。⁽⁵¹⁾あわせて前庭の系譜は全て、日本国内独自発生的なものではなく、高句麗地域に求められることが確実となったことから名称を変更し、従来「上野型」と呼称していたものをA型、「美濃型」と呼称していたものをB型に置き換えた。また、東北地方における「ハ」の字型羨道については、前橋蛇穴山古墳に見られるような羨道部を欠いて、玄室に直接、前庭を付設する構造と理解した。この点については、北部九州地方ほかで認められている途中まで天井石が構築される事例が含まれている可能性もあながち否定はできないことから、今後の調査で確認されることに委ねて、現段階では保留しておきたい。なお、こうした東北地方における前庭の有り方は、色麻古墳群や、猫谷地・五条丸古墳群など拠点的にまとまって確認されており、「蝦夷」経営に関与したとされる「上野地域」のヘゲモニーを示していると解釈した。1998年に群馬県古墳時代研究会は『群馬県内の横穴式石室』（西毛編）の中で、前庭についても触れている。分類については基本的には加部二生（1997）に基づいている。⁽⁵²⁾この中で、吾妻郡、碓氷郡域では前庭が認められないことが読み取れる。おそらく利根郡域を含めた山間部の古墳については、終末期古墳であっても前庭を持っていない可能性が指摘される。これらの理由については別項を予定している。なお、このほか群馬県地域の前庭を扱った鹿田雄三（1992・1995）があるがここでは割愛する。⁽⁵³⁾

④……………前庭の起源と系譜

前庭の起源や系譜を考えると、これらはあくまでも付随した施設であり、当然、主体部である横穴式石室のことを差置いては考えられない。しかし、横穴式石室の系譜を考えるとあまりにも複雑な要素が交差し、かえって問題を混乱しかねる可能性も秘めている。また、横穴式石室の研究はすでに飽和状態に陥った感もあり、十分に議論をされつくしていることから、新たな資料の追加が羨望されているのは、文献史学に通ずるものである。こうした状況を踏まえて、ここでは前庭

という形態の特異性を重視し、横穴式石室をある種の側面から考えてみたい。

従来より、前庭の系譜については、鬼頭清明(1989)などに代表されるように、上野国に土着の形式である可能性が指摘されてきた。さらに、終末期古墳に特有なものとされ、上野以外の地域には存在しないとさえ云われていた時期すらある。ところが、すでに述べてきた通り、その出現と系譜は高句麗に求められ、しかも、日本の古墳時代前期には既に普及していることが明らかとなった。

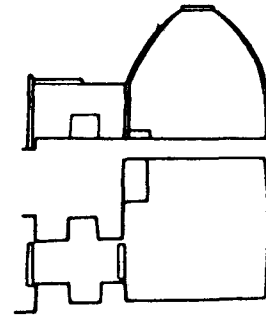
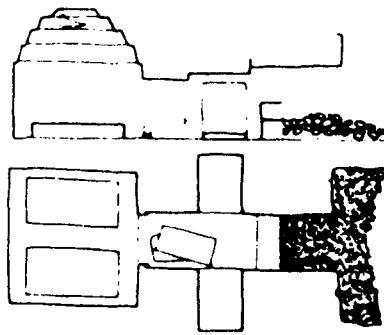
前庭の起源が4世紀代の高句麗地域に求められる根拠として、高句麗では既にAB類ともに4世紀段階には出現していて、その後も継続して構築されており、北部九州に波及した初期の横穴式石室に前庭が認められること等を指摘することができる。

前庭は日本列島における横穴式石室の出現と共にもたらされたものであり、7世紀代になって日本国内で発生したものではないことは断言できる。

**(1)高句麗地域における
横穴式石室の前庭**

高句麗地域の古墳で発生したと考えられる前庭は、おそらく鴨緑江・渾江流域あたりの積石塚の埋葬施設が堅穴式石室から横穴式石室へと移行する中で成立したものと推定され、あるいは、遼陽系多室墓か中国系住民の在地塚室墳が影響を及ぼしている可能性もある。その後、高句麗地域では王陵クラスの主要古墳に受容され⁽⁵⁴⁾、渤海国に取って代わった8世紀代に至るまで確認されている。前庭を有する古墳の分布を見ると、鴨緑江流域の桓仁地域、輯安地域、大同江流域の平壤周辺域に散在する古墳群に多く認められている。現在までに確認されているA類の前庭で最古の事例は、桓仁地域で調査されている米倉溝1号墳(將軍墓)⁽⁵⁵⁾である。同墳は、米倉溝古墳群中最大規模を有する壁画古墳で、定形化した台形前庭部に石敷きを持つ。古くは鳥居龍蔵博士によって踏査され、1944年には三上次男氏が調査している。有耳室双室墳で、壁画は後室の四壁と天井部、両耳室、石門に描かれている。本墳と石室構造が類似して、やはり前庭を有する可能性を持つ山城下332号墳とは、2基ともに両耳室及び玄室に描かれた「王」字文に共通したモチーフが表現されており、同一の造墓集団の存在及び、共通した造営思想が想定されている⁽⁵⁶⁾。山城下332号墳は出土帯金具が広東省広州大刀山の東晋太寧2年墓(324年)の帯先金具に類似し、4世紀中葉～後葉に位置づけられるもので、米倉溝1号墳もこれらに近い時期を想定することができる。また、翼垣部が未発達ではあるものの、やはりA類に位置づけられる安岳伏獅里壁画古墳も4世紀終末には構築されている。これらが築造された時期は日本で鋤崎古墳が築造された時期に近いことが注目される。A類前庭で5世紀代の典型例としては、高山里10号墳が確認されている程度であるが、高句麗地域の調査例はまだ少ないので、これらの報告はかなり断片的なものであることを留意せねばなるまい。6世紀前半代に比定される通溝(禹山下)四神塚古墳で確認されていることから、今後、これらの間を埋める5世紀代の資料が増加する可能性は高いといえよう。これらに続いて、6世紀中頃に輯安地域で五蓋墳4号墳、湖南里四神塚古墳が相次いで構築される。この時期のA類前庭は形態的に発達して、巨大化したものが認められ、極端な例では玄室部よりも前庭部の方が大きい事例も確認されている。東潮(1993)では、これらを「高山里型石室」と命名している。いずれも四神図・装飾文を主体とした壁画古墳で、被葬者は王族を含めた上位5等以上の官人層の墓と限定している点が注目される⁽⁵⁸⁾。一方、李殿福(1991)では、輯安五蓋墳4号墳、同5号墳、通溝(禹山下)四神塚古墳の内部構造は細工が精緻であり、平滑に整った石の表面には鮮やかな色彩の壁画が描かれている。特に梁石側面と、天井の隅石の下面及び天井頂部に

A.D. 300年

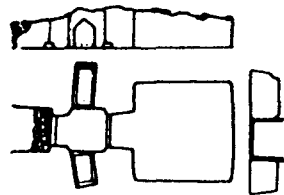


A.D. 400年

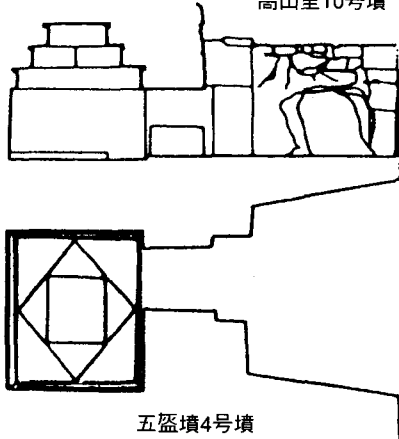
米倉溝 1号墳

安岳伏獅里壁画古墳

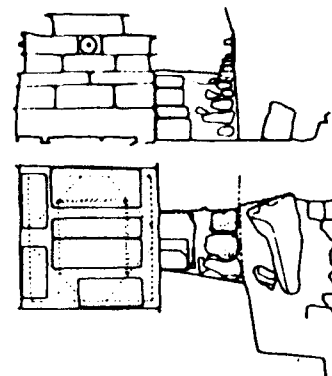
A.D. 500年



高山里 10号墳



五箇墳 4号墳



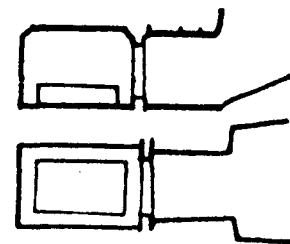
通溝四神塚古墳

A.D. 600年



高山里 1号墳

A.D. 700年



和龍貞孝公主墓



fig. 4 高句麗横穴式石室墳のA類前庭 (註18文献より作成)

は竜を題材としたモチーフが総数で三十数頭描かれている。竜は帝王を象徴するものであることから、これらの大型石室封土墳は王陵であったと指摘されていた。⁽⁵⁹⁾ 湖南里四神塚古墳は山寄せに造られた一辺34m、高さ4mの規模を有する3段築成の封土方墳である。墳裾の周囲には幅3mの敷石帯が有り、谷側の基底部には列石を巡らす。横穴式石室は甬道付きの単室両袖型で、玄室天井は各二層の平行三角持送り式である。副葬品に彩文土器の蓋と金銅製帯金具があり、6世紀中頃に比定される。東潮氏は本墳を陽原王（在位期間545～559年）陵に比定している。⁽⁶⁰⁾

A類前庭の系譜はその後、7世紀初頭に構築された高山里1号墳で確認されている。本墳は朝鮮総督府による調査報告書で古くから知られる。松本浩一（1976）でも本墳の前庭の存在から高句麗との関連性は指摘されていたが、他の事例が全く知られていなかったために、例外的な扱いを受けている。1号墳は高山里古墳群中でも最大級の規模を有する、一辺20m、高さ3.5mの方墳で、横穴式両袖石室の玄室部壁面に四神図を主体とした壁画が描かれていたことで知られる装飾古墳である。A類の系譜はその後、793年の紀年名墨書のある吉林省和龍貞孝公主（王女）墓でも確認することができる。本墓は、地下に構築されており、墓室は磚積の長方形プランで、天井は四層の平行持送り式、地上には塔が建てられている。羨道の前面部分は地上から墓室へと下りる通路が階段状になっており、平面形が台形を呈していることから、A類前庭の系譜上に位置づけたい。おそらく高句麗の王陵で採用されていた墓制は、8世紀終末の渤海国王陵にも継承され終焉していったものと推定される。群馬県地域を中心とした日本国内で数多く前庭が築造されていた頃には、大陸でもまだその系譜が残存していたことが明らかとなった。

一方、B類前庭としては輯安万宝汀1368号墳が4世紀前半には構築されている。奥壁から見て右片袖型石室で、玄室内には木造建築の壁画が描かれる。短い羨道部には変形した前庭を付している。左翼垣は直線的に伸びていて、右翼垣のみ「ハ」の字状に開く形態で、B-1-b類前庭の代表例である。穹窿状天井を有して右片袖である点から、玄室壁体に「永和九年三月十日遼東韓玄菟太守領佟利造」という在銘磚を用いた磚室墳である佟利墓との類似性が指摘されている。⁽⁶²⁾⁽⁶³⁾ 輯安壁画古墳の編年では最古に位置づけられており、東晋永和9年（353年）に先行する時期の構築と推定されている。続く4世紀後半には麻線溝1号墳が築造されている。玄室規模は高句麗地域最大の輯安將軍塚古墳に次ぐ大きさを持ち、穹窿状天井式である。龕が発達して側室に変容したものを前室の両側部に付ける。玄室中央部に柱の立つ構造は安岳3号墳の多室墓の系譜で捉えられる。側室は独立した天井構造を持ち、羨道の天井よりも高い。後室後壁左端に墓主像が描かれており、穀倉、卷雲文、蓮華文なども確認できる。万宝汀1368号墳の壁画が継承されたものと考えられている。副葬品として出土した四耳壺はこの種のものでは最古型式に位置づけられており、⁽⁶⁴⁾ 三葉文円頭形環頭大刀、馬具轡、杏葉なども出土している。また、太環式耳飾りは冠帽の垂飾として利用された可能性をもつもので、佟利墓に類例がある。5世紀代には高山里15号墳（5世紀前半）、中和伝東明王陵、（5世紀中葉）、高山里7号墳（5世紀末）と続いて、6世紀初頭には美濃周辺のB-2類前庭に類似した、土浦里大塚古墳が築造される。本墳は土浦里古墳群中最大規模の一辺30m、高さ約8mの規模を有する方墳で、墳丘の基底部には方形の列石が巡らされている。石室は狭長な羨道を有する両袖型石室で、玄室はやや長方形の平面形を呈する。天井構造は、2段の平行持送りと1段の三角持送りを有する。副葬品として、石枕、弓形鉄鈎、四耳壺があり、棺釘等も出土している。弓形鉄鈎

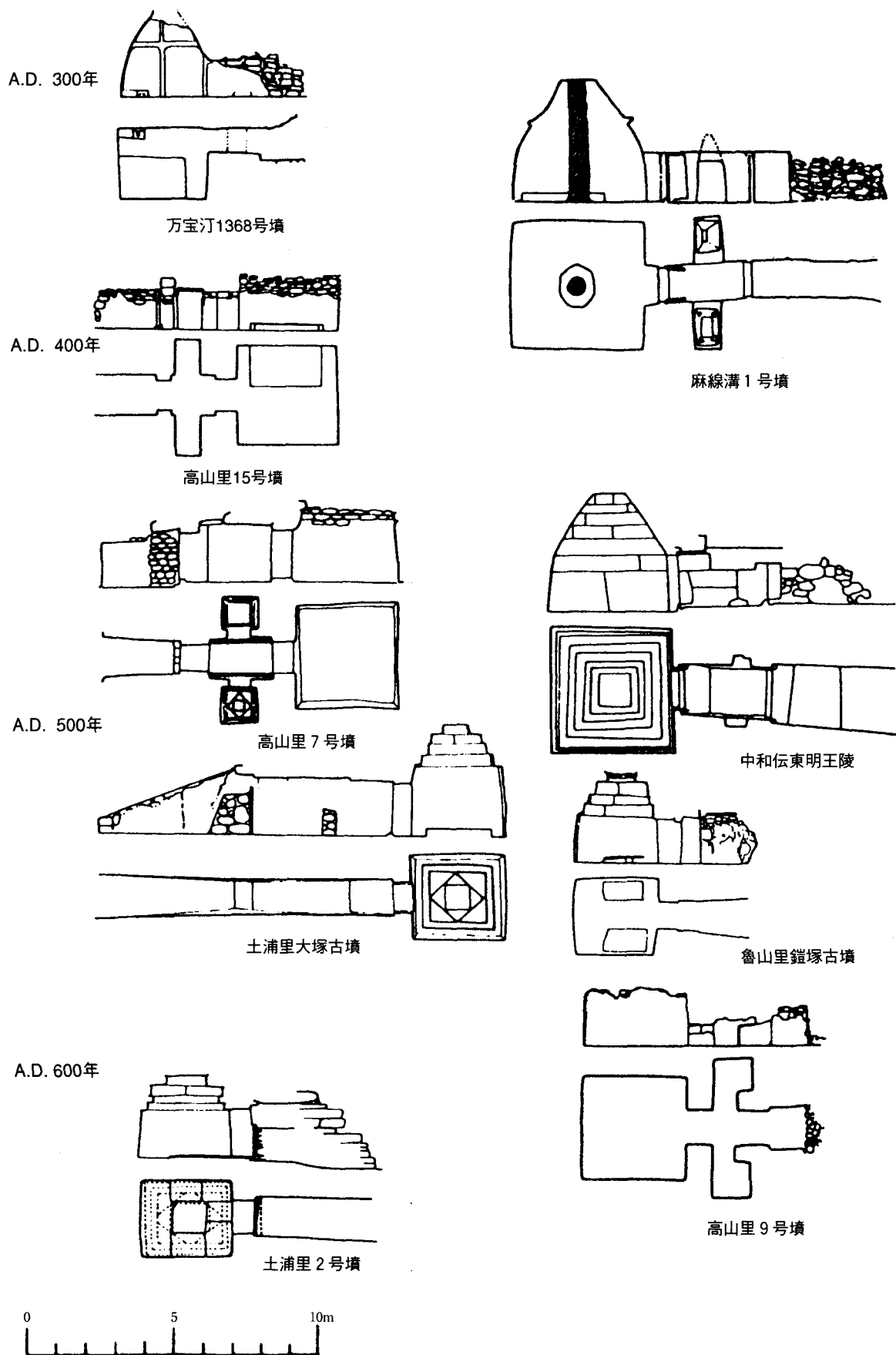


fig. 5 高句麗横穴式石室墳のB類前庭 (註18文献より作成)

は、円形の座金具が付くもので禹山下41号墳に類例が確認されており、旗竿などの用途が推定されている。⁽⁶⁵⁾出土した四耳壺の年代は、輯安三室塚古墳出土品よりも新しく、5世紀末から6世紀前半代の時期が比定される。その後、6世紀前半に鎧馬塚古墳、6世紀中頃には高山里9号墳が相次いで構築されている。伝東明王陵は、建国始祖である東明王（在位期間 B.C. 37～B.C. 19年）が移葬された始祖廟とする説と、美川王（在位期間 A.D. 300～331年）廟説、A.D. 427年平壤遷都後の中始祖で、広開土王碑を建立した長寿王（在位期間 A.D. 413～491年）陵に比定する説がある。墳丘は、切石積の下段上に方台形の盛土がされたもので、横穴式石室は前室に龕を付設した複室構造をもつ。玄室は床面規模4.14m×4.21mと高句麗地域でもトップクラスで、6段の平行持送式天井を有する。また、土浦里大塚古墳も文咨明王（在位期間492～519年）陵に比定するのが定説であることから、A.D. 519年の絶対年代が付されている。⁽⁶⁶⁾李殿福（1991）や東潮（1993）の指摘から、あるいは王陵には伝統的に前庭を付設するような仕様が存在した可能性を持つ。なお、広開土王（在位期間391～412年）陵に比定する説もある輯安將軍塚の羨道部も「ハ」の字型に開く形態で、羨道先端に天井石は構築しない。⁽⁶⁷⁾従来公表されている実測図では、その部分が梱石状の施設で区画されており、B類前庭と捉えることもできる。しかし、この梱石の部分から石室内部に向かって段をもつて下がる半地下築造様式となっているが、『朝鮮古蹟図譜』などの写真を見る限りは閉塞部分の残痕とも考えられる。羨道側壁部分から見たのでは区画の意識が認められないことから、ここでは類例からは除外して考えたい。

**(2)日本列島における
前庭の系譜**

日本国内の前庭は4世紀末葉～5世紀初頭に鋤崎古墳の北部九州型石室において導入される。同墳の横穴式石室の構築にあたっては高句麗で造墓に携わっていた工人の設計もしくは関与が推測される。これに先立つ谷口古墳の竪穴系横口式石室にも類例が認められるものの、同じく初期横穴式石室を代表する老司古墳には前庭が存在しないので対象的である。

鋤崎古墳における前庭の系譜は、5世紀前半代には熊本県城2号墳に看取することができる。この系譜は別当塚東古墳、釜塚古墳、関行丸古墳と北部九州型石室に継承されていくが、城2号墳まではあった短い羨道部が省略されて、いきなり前庭へ連なるような平面形へと変化していく。天井石は一部構築されていて、どこから前庭と区分したらいいのか解らないファジーなタイプと、玄室の前面部分に天井石は構築されず、羨道を省略していきなり前庭に連なるタイプが確認されている。これらの変化については、北部九州内部での変容なのか、あるいは外部からの影響なのか明らかでない。一方で、竪穴系横口式石室の系譜では、勝浦12号墳前方部石室、汐井掛17号墳などで前庭を確認することができる。これらは横穴式石室及び前庭の系譜から見ると一連の流れの中で辿れるようなので、谷口古墳の影響化に成立している可能性は高い。A-1-a類前庭の鋤崎古墳以降は、前庭が狭長化の傾向があり、それ以外のすべての古墳はA-4類前庭に分類される。なお、石障を四周に配した肥後型横穴式石室を有する井寺古墳はA-1-a類前庭として位置づけた。北部九州系の横穴式石室がいずれもA-4類前庭へと変遷を遂げて行く中で、異なった動きを示すものであり、イレギュラーな事例として注目される。一方、北部九州地域におけるB類前庭の初源は、伊万里市小島古墳と考えられる。5世紀終末～6世紀前半代と思われ、A類前庭に比してかなり遅れていることから、別系譜で伝播している可能性が高い。また、5世紀終末～6世紀初頭に位置づけら

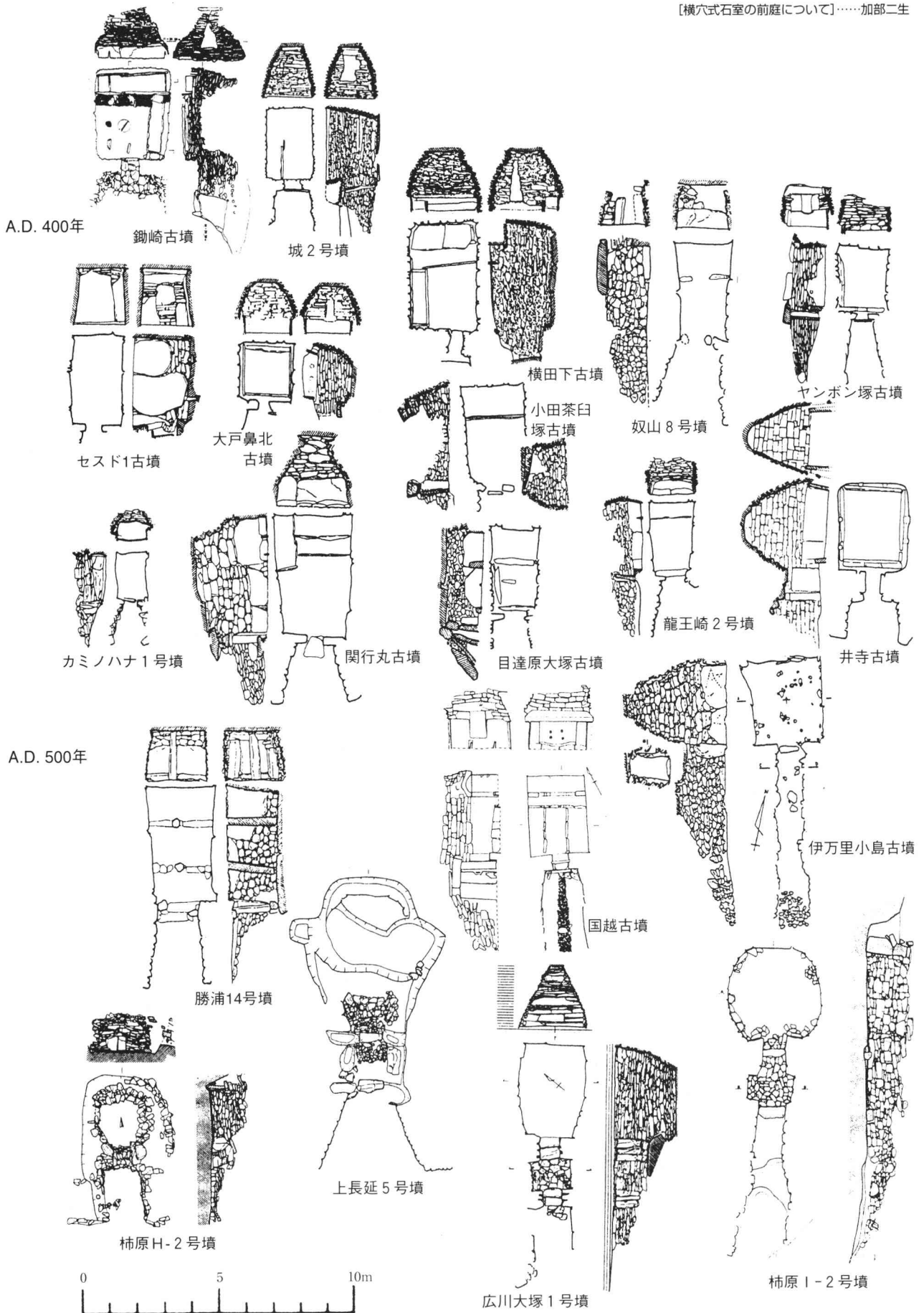


fig. 6 北部・中部九州における前庭の変遷

れている番塚古墳では特異な形態の A-5 類前庭が確認されているが希有な事例である。6 世紀以降には北部九州で A 類前庭の系譜が一部で定着して、片山 9 号墳、勇猛山 3 号墳、稲童 8 号墳、稲童 21 号墳、七双子 2 号墳、妙見 29 号墳などで確認されている。一方、福岡県八女郡広川町大塚 1 号墳 2 号石室では、隣にある 1 号石室にむかって墓道があると報告されている。石の積み方が不規則で貼り付けたものもあるという。6 世紀後半の須恵器を出土している。同じ広川町の上長延 5 号墳も報告では墓道としているが、これなどは上野地域の前庭と遜色無いもので、やはり 6 世紀後半の須恵器を出土している。甘木市柿原古墳群 2 号墳では、羨道から内護列石（群馬県内では石室控え積みと呼ばれている構造である。）と呼んでいる構造へ至るまでの間を袖状部と呼んでいる。これらは B 類前庭に分類されるもので、6 世紀後半代に位置づけられる。同じ古墳群内でも 18 号墳、20 号墳、21 号墳では A 類前庭が確認されており、こうした前庭 A、B 類が混在した在り方は、高句麗の高山里古墳群などに類似する。

④……………前庭の分布

以上、概観してきたように、日本列島では北部九州地方で最初に受容された前庭の系譜は、変質しながらも国内で次第に拡散していく状況が伺える。一方、畿内大和地方のように頑なに受け入れない地域もあり、受容しても定着する地域はごく限られている。日本国内各地への波及状況を調べるにより背景にある社会的な繋がりが垣間見えればと考えている。

(1)日本各地への波及

北部九州地域で受容された横穴式石室は、次第に全国へと広がっていく。これらの系譜は、日本海ルートを経て若狭や丹後東部に波及していることが指摘されている。福井県大飯郡高浜町二子山 3 号墳や、美浜町獅子塚古墳、加悦町入谷西 A-1 号墳は九州地方における関行丸古墳段階以降の構築と考えられる。羨道と呼んでいる部分の一部には、天井石は無く、閉塞石の充填も及ばない。平面形は「ハ」の字状に広がる。一方太平洋瀬戸内ルートのもは、志摩おじよか古墳に影響を及ぼしている。本例は若狭よりも先行する 5 世紀中頃と考えられるが、天井石の構築は「ハ」の字型羨道の殆どに及んでおり前庭とは認めない。また時期は異なるが、山陰地方の石棺系石室も玄室の前面の形態は前庭に類似しているが、こちらも天井石が存在するので、本稿では除外する。

中国瀬戸内周辺ではあまり知られていないものの、四国では北条市龍徳寺山 1 号墳で確認されている。左片袖型石室を有する初期の横穴式石室で、羨道部から屈曲する B 類前庭を持つ。片袖型石室の事例は高句麗や九州でも珍しく、高句麗では 4 世紀代の万宝汀 1368 号墳に認められる程度である。しかし、両袖型でも片側に偏った石室が安岳伏獅里壁画古墳や輯安五蓋墳 4 号墳で確認されており、前庭を持たない古墳では普遍的に認められる。北部九州でも、横田下古墳、奴山 8 号墳、勝浦 14 号墳などに認められているが、龍徳寺山 1 号墳玄室プランは正方形に近く、これらの事例よりも遙かに高句麗的である。但し、高句麗および北部九州型、畿内型 B 類横穴式石室などに見られる偏りはいずれも右寄りであり、左片袖の事例としては筑肥型の藤山甲塚古墳例が知られる程度であるが、龍徳寺山 1 号墳の場合は石障は無い。

若狭で受容された北部九州系石室に付帯する前庭も、この地域ではあまり定着しなかったようで

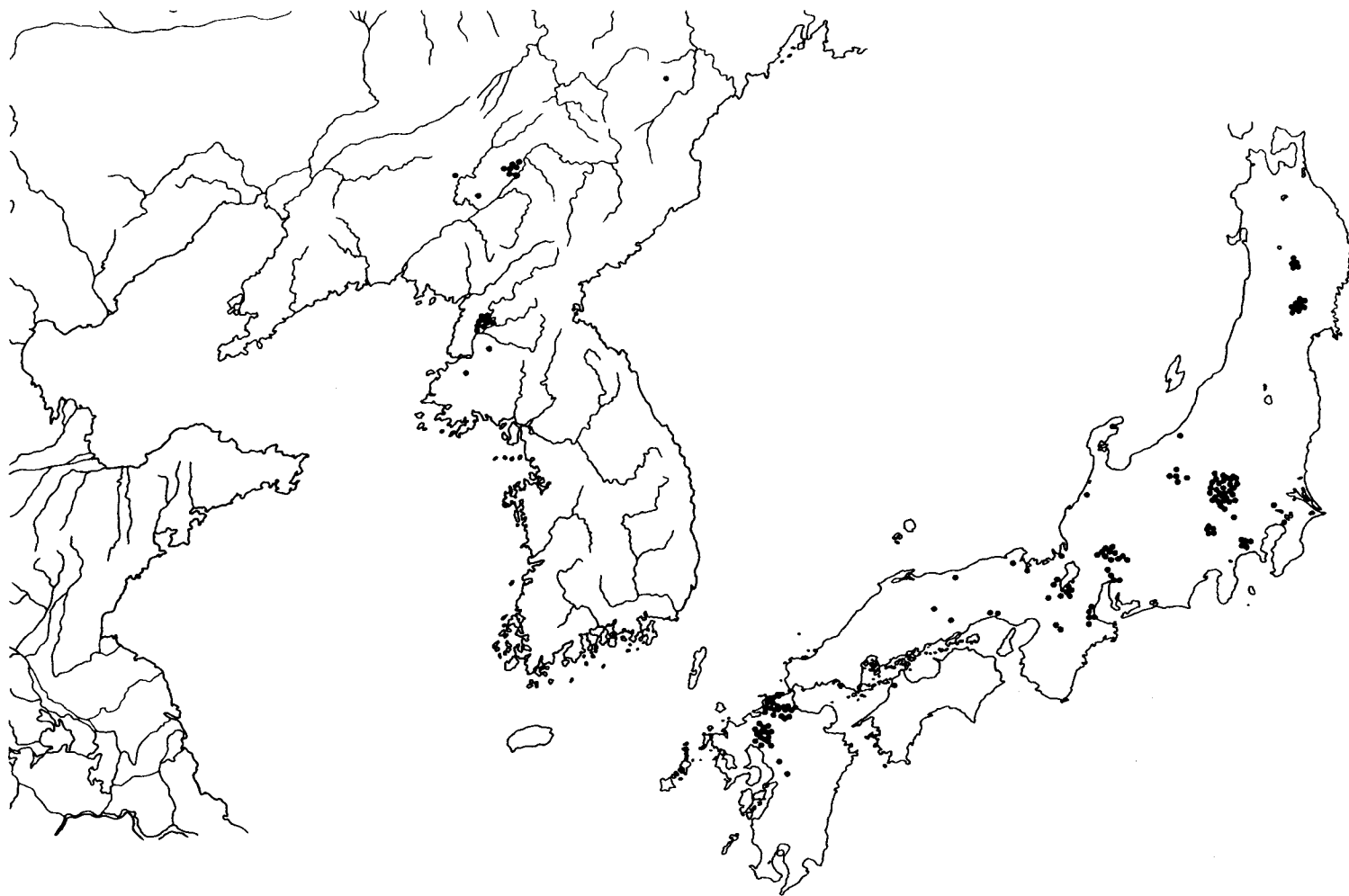


fig. 7 前庭を有する古墳の分布（主に本文中に関連するもの）

ある。可能性としては、変質を遂げた事例が、能登大畠南1号墳などに認められ、関連性があるのかもしれない。

畿内中枢部の大和地域において前庭の事例は今のところ乏しい。わずかにその可能性を持つものとして、土生田純夫(1983)で指摘している牽子牛塚古墳例が推定される程度である。同墳の築造は7世紀後半以降であり、高句麗の最末期で滅亡する時期とも重なる。もし仮に前庭を受容していたとしても周辺地域から比べると明らかに遅れ、その数も極めて少ないことは指摘できる。単に伝統性を重んじるのであるならば、横穴式石室の受容にこそ抵抗があるはずである。その点、横穴式石室については、周辺地域に遅れる事なく受容されている。これらの現象は、おそらく5・6世紀代までは畿内大和勢力は百済との結び付きを強めており、敵対する高句麗系造墓集団を受け入れなかったことが反映されているのではなかろうか。しかし、大和以外の周辺地域ではそれほどの拘束力をもっていたとは思えない。例えば畿内周辺では近江にはB類前庭が確実に入っているし、伊勢・志摩、伊賀、播磨、丹波地域などでも類例が認められる。畿内では山城でB類前庭が認められており、大和に接する、河内の東大阪に2基が相次いで築造されている。7世紀第Ⅱ四半期に比定される墓尾3号墳と、7世紀第Ⅲ四半期に比定されるイノラムキ古墳で、墓尾3号墳が典型的なB類前庭と考えられるがイノラムキ古墳例の詳細は明らかでない。土生田純夫(1983)の復原案から強いて類例をあげるとするならば、A-5類が近いと思われるが異形である。すでに土生田氏が指摘しているとおり、この両墳ともに3段築成の方墳で第二・三段に外護列石が巡る点など、高句麗的な要素を持ち合わせた古墳である。

東海地方では美濃地域周辺に多く散見することができる。特にB類前庭が普及している点の特徴とする。6世紀初頭の二又1号墳はA類前庭の可能性もあるが、詳細は再調査して見ないとわからない。B類前庭の中では、次郎兵衛塚1号墳に代表する一群は特筆される。平面的には羨道部との境に屈曲部を持たず、縦方向の目地で仕切ることによって区画され、羨道の幅に連なって次第に開いて行く長い前庭部を有するものである。類例として、南大塚古墳、稲荷塚1号墳がある。特に、次郎兵衛塚1号墳は前庭部分の平面形だけを重視するならば、平安南道大同郡柴足面にある土浦里大塚古墳に類似する。(fig. 8 参照) 玄室天井部上面の平行・三角持送り天井を除けば立面的にも似た形状となる。さらに両者ともにほぼ同規模の方墳であることも注目される。気になるのが時間的な問題であるが、土浦里大塚古墳では玄室内から石枕、棺釘、弓形鉄鉤が出土している。この弓形鉄鉤は円形座金具の付くタイプで禹山下41号墳で類例が認められる。出土した四耳壺の年代は三室塚古墳よりも後出し、5世紀末葉～6世紀初頭に位置づけられることから、文咨明王陵説をとるとA.D. 519年の絶対年代を比定できる⁽⁷⁰⁾。一方、次郎兵衛塚1号墳の年代は石室内出土の須恵器が猿投編年の東山44号窯期に属すると思われることから、6世紀後半代に比定され、時間差がある。しかし、美濃周辺地域ではTK10型式期にはB類前庭が出現しており、九州地方ではあまり定着しなかったB類が普及していることはこの地域の特徴として指摘される。(fig. 9 参照) おそらく北部九州を経由しないで高句麗からの直接的、あるいは間接的な影響化に成立したものと考えられる。これ以外の東海地方では西三河にB類前庭の存在が知られている。美濃の事例よりも先端が極端に開いており、あるいは志摩おじよか古墳あたりの系譜が変質をとげたものが入ってきている可能性も指摘される。中には石田2号墳のように、A類と思えるくらいの開き方を呈する事例もある。

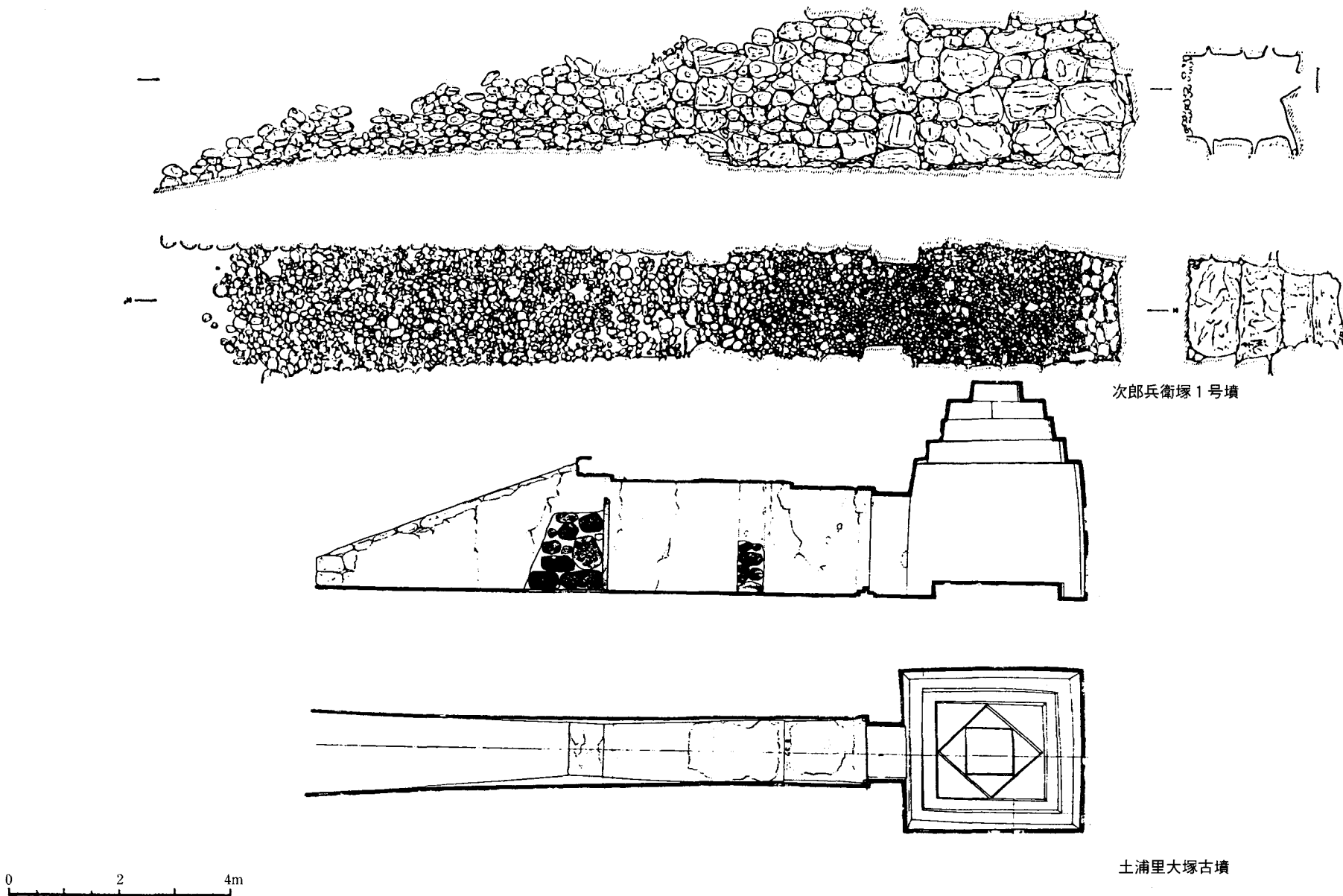


fig. 8 美濃と高句麗のB類前庭

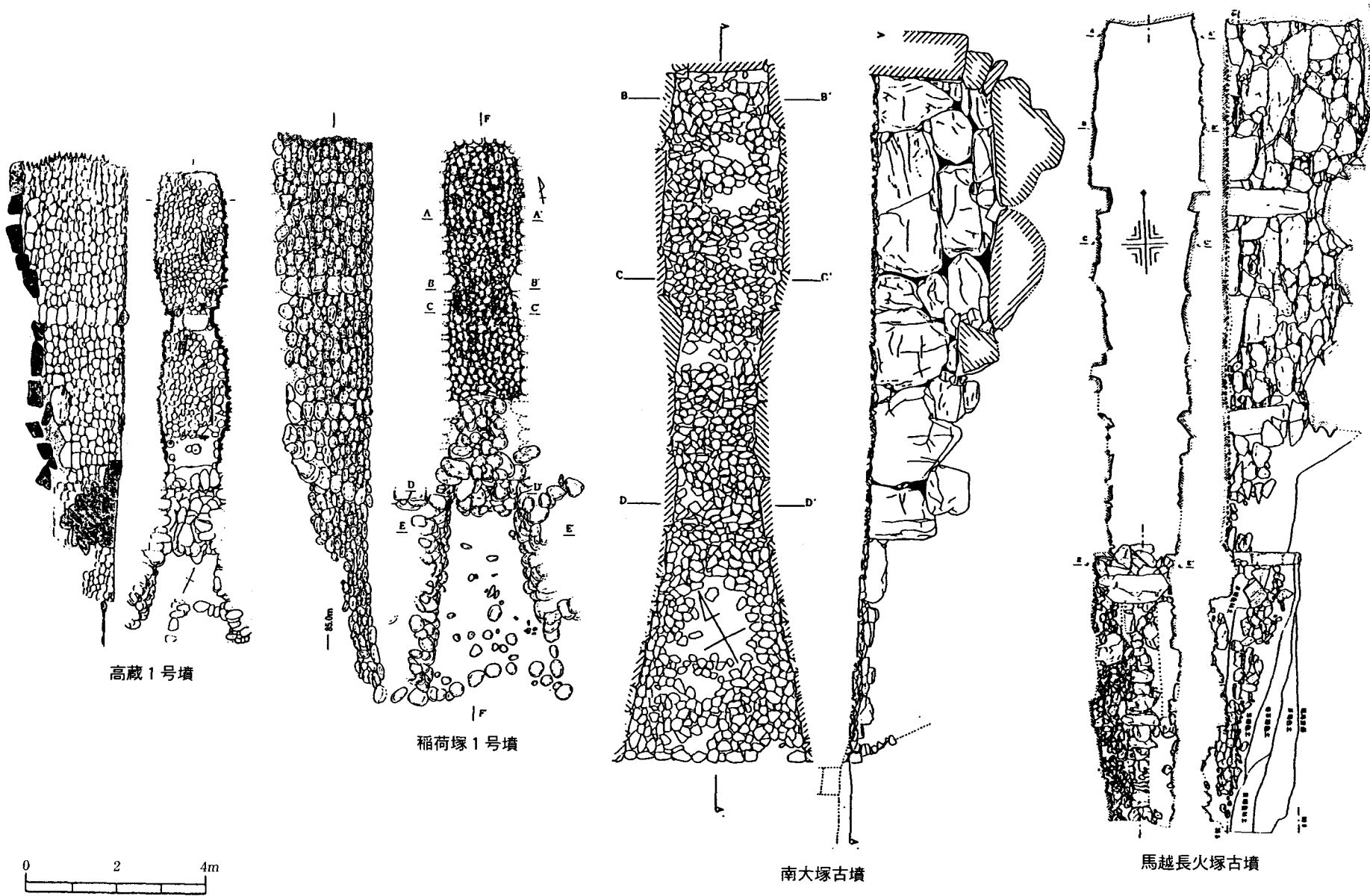


fig. 9 美濃周辺地域におけるB類前庭

伊賀でも B 類前庭が多く、小谷 1 号墳、同 2 号墳、下中島 2 号墳、筒御前古墳、向山 2 号墳、陣原 16 号墳などで確認されている。西三河と同様に美濃の事例よりも開きが著しく、おじょか古墳の影響を考慮する必要性があろう。

相模では秦野桜土手古墳群にまとまって確認されており、そのいずれもが B 類なので、これらは東海道ルートによって美濃の影響を受けながら成立したものと推定される。周辺の伊勢原市あたりにもこれらに類似した事例が認められる。

中部高地では信濃の佐久市三河田大塚古墳は確実であるがそのほかに、皇子塚古墳、他田塚古墳、鶴萩古墳等が可能性を持つ。甲斐には四ツ塚古墳群などにまとまって確認されている。同古墳群では羨道の短いものが多く認められている。また、無袖で、玄室と羨道の区分が不明確でありながら、いきなり前庭が「ハ」の字状に開くタイプが認められ、若狭で変質をとげたものが加賀や能登へと波及した段階に導入されたものか、あるいはもっと複雑な経路を経てきているのか明らかでない。本古墳群では 2 基のみ（37 号墳、40 号墳）墓道を有することから、時間的な問題なのか細かい分析を要する。なお、信濃、甲斐等で多く検出され、高句麗との関連性で捉えられることの多い、積石塚古墳については前庭が確認されていないようである。しかし、規範となる高句麗の前庭をもつ古墳が積石塚では無いことと、日本国内の積石塚に階段式の高句麗に典型的なものも存在しない点も指摘されよう。

越後では僅かに水科 21 号墳に認められる程度である。B 類前庭に分類される。どういう経路で搬入しているのかは不明である。

東関東では常陸・房総半島に僅かに確認されている程度である。割見塚古墳と日立精機構内 1 号墳で、いずれも B 類である。特に、我孫子古墳群中の日立精機構内 1 号墳では、前庭部分に柱穴列が確認され、これらの遺構は石室や前庭と有機的な関連があったと推定されている。こうした類例は鋤崎古墳の前庭部前面にも確認されており、上屋構造が存在した時期もあったのであろうか。いずれにしてもあまり一般的ではない。

(2) 上野地域への浸透

かつて尾崎喜左雄博士は、群馬県の高句麗時代墓制については高句麗からの影響を重視していた。その理由として「巨石、大石といった石材が採取し易かったので、高句麗的な石室の型をまず受容したのではないか。」と述べられている⁽⁷¹⁾。前庭の系譜が明らかになるにつれ、従来の北部九州系や畿内系石室ではあまり重視されていなかった高句麗との関係が再浮上してくる。すでに 30 年以上も前に予見している見識眼にただ畏れ入る思いである。

日本国内の古墳でもっとも前庭が受容され、普及したのは言うまでもなく群馬県、旧上野国地域である。松本浩一（1976）の頃はまだ調査例が少なく、僅かに 37 基しか集成されていなかった。しかし、近年の大規模開発に伴う調査により、その確認例は激増している。特に A 類前庭の普及率は著しく、おそらく調査された前庭の 9 割以上は A 類と思われる。これらの全貌は明らかにしがたいが、最終的には 3000～7000 基程度の古墳に A 類前庭が付帯していたと推定される⁽⁷²⁾。

A 類前庭に前方後円墳が存在しないという松本浩一（1976）の仮説はいまだに破られていない。おそらく構造的な問題が影響しているものと推定される。しかし、前庭を付設するものが截石切組積横穴式石室やこれに準ずる特定したものに限るという見解は、右島和夫（1989）などで批判され

時期（須恵器型式期）

TK10

少林山台17号墳

MT85

TK43

芝宮81号墳

吉田2号墳

しどめ塚古墳

奥原53号墳

TK209

蟹沼東17号墳

石原稲荷山古墳

TK217

蟹沼東59号墳

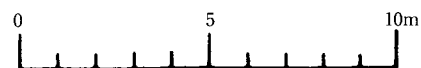


fig.10 上野地域における6世紀代A類前庭の変遷

時期（須恵器型式期）

TK10

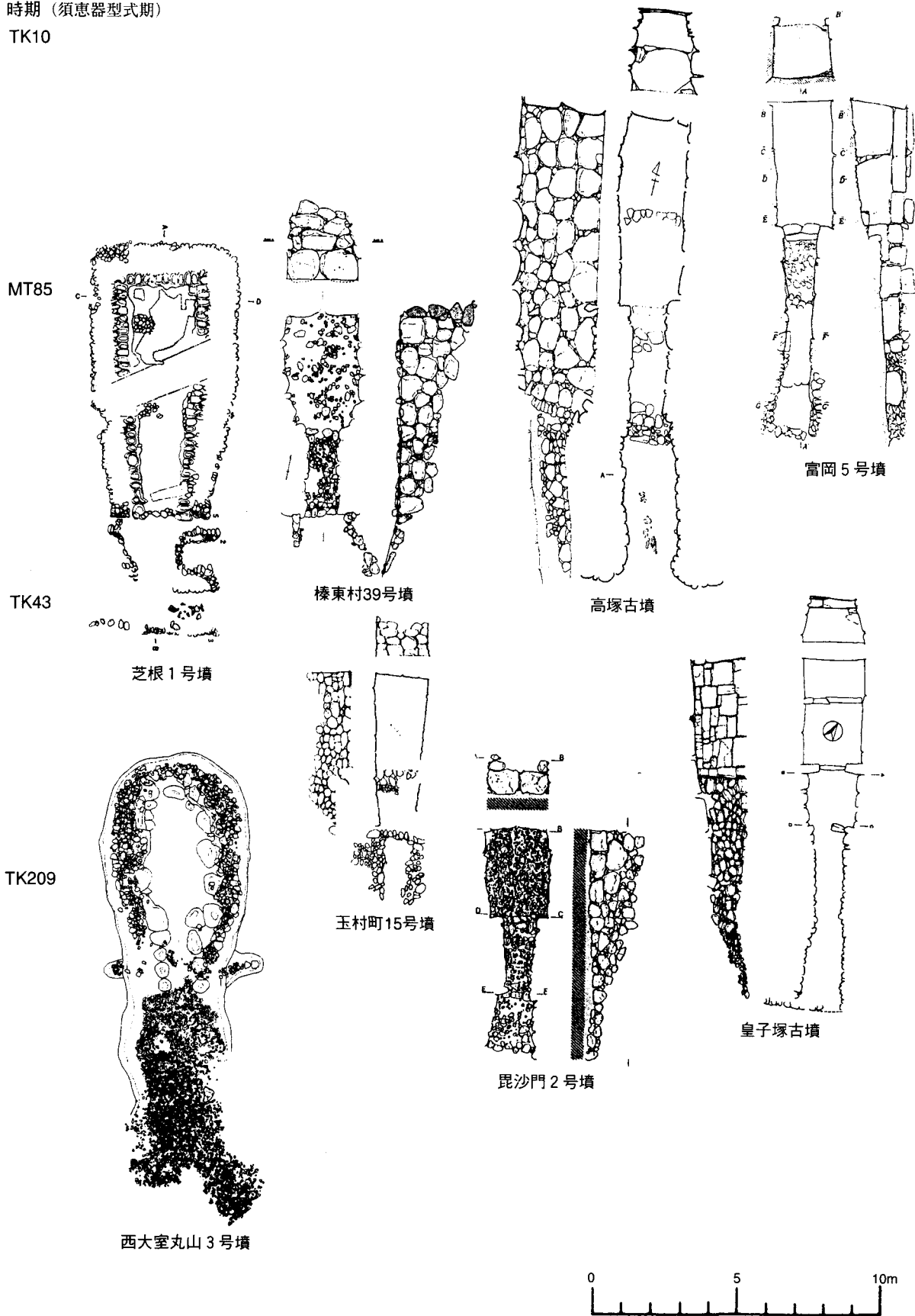


fig.11 上野地域におけるB類前庭の変遷

ているように現在の研究からは成り立たない。⁽⁷³⁾また、B類前庭からA類前庭が発生する考え方も成り立たないことは以前述べたとおりである。B類前庭は、高塚古墳や富岡5号墳といったTK10型式期にはすでに出現しており、群馬県内の横穴式石室としても初期段階からすでに導入されている。(fig. 11参照) これらの中で、殆どはB-1-a類前庭に分類されるものであるが、玉村町15号墳のようにB-1-b類前庭や富岡5号墳、皇子塚古墳例のようなB-2類前庭も確認されている。石室のプランも両袖型が殆どであるが、玉村町周辺では無袖型石室も確認されている。また初期のものでは前方後円墳も認められているが、あまり一般的では無かったようである。

上野地域でもっとも多く一般的な形態を呈するのはA-1類前庭で、袖垣と翼垣の角度でさらに細分される。(fig. 2参照) 現段階で上野地域に最も古く出現するのはA-2-b類前庭で、少林山台17号墳ほかで確認されている。続いて最も一般的なA-1-a類前庭、偏りのあるA-1-c類前庭と続き、蟹沼東59号墳、金井古墳などで確認されているA-1-b類前庭、宝塔山古墳に代表されるA-2-a類前庭などは7世紀代になってからの出現である。A-3類前庭に比定される蛇穴山古墳例は同型の事例が高句麗輯安五蓋墳4号墳にあり、⁽⁷⁴⁾近年の研究では平地神社古墳にも認められている。なお、B-3類石室の虚空蔵塚古墳例と同型の事例が、万宝汀1368号墳例にあるが全く時期が異なる。

(3)東北経営への派遣

A類前庭が上野地域のつぎに普及した地域は東北地方である。色麻古墳群、猫谷地古墳群といった大規模な古墳群に浸透していったと考えられる。(fig. 12参照) これらの中で、A類前庭についてはすべて、上野地域の影響化で成立したものと推定される。特に色麻古墳群については、500基からなる大群集墳に殆ど前庭を有しているらしく、今後、これらの全貌が明らかにされれば、上野地域との関係がより鮮明に明らかにされることと確信している。また、これらの古墳の殆どは胴張りプランを有するもので、その形態も上野的であると言えよう。すでに以前に指摘したところであるが、羨道部を省略して玄室にいきなり前庭を付けるタイプも東北地方全域にわたって比較的多く認められる。上野地域では蛇穴山古墳に代表されるこのタイプは、全国的に見れば、北部九州系の初期横穴式石室からの系譜でも確認されているところであり、上野地域を経由しなくても東北地方へはあらゆるルートで入る可能性を秘めている。

岩手県北上市の猫谷地古墳群については、上野の直接的影響というよりは、かなり在地化したものであろう。あるいは、色麻古墳群のある仙台平野周辺でワンクッション置いて在地化してから北上に入っている可能性もある。同古墳群でも胴張りプランはあるが色麻古墳群のそれより張りが弱く、明らかに形骸化している感をうける。また石室構造の随所にもローカル色が色濃く出ており、色麻古墳群の石室が在地色の中で同化していったものが猫谷地・五条丸古墳群へとたどり着く感がある。一方の色麻古墳群については、関東的であり、東北経営の基地となる拠点といった感をうける。こうした状況は日本全国を概観したときに、例えば相模の桜土手古墳群であったり、甲斐の四ツ塚古墳群といった具合に拠点的に確認することができる。おそらくかつて埴輪造りの工人達がそうであったように、造墓の集団というものがあって、移動していくことにより構造的に類似した墳墓が各地に築造されていくのではなかろうか。色麻古墳群及び猫谷地古墳群に認められるものはA類前庭であるが、その他の地域で確認されている羨道を省略するタイプについてはB類前庭で

構成されている。

(4)前庭の波及と伝播

東アジア的な視野に立って前庭の分布を概観して見た。一部重複するが、これらをまとめて各地に波及していく実態を明らかにしたい。

高句麗に於いて発生した墓系の系譜は百濟、新羅、伽耶地域では根付かず、朝鮮半島を素通りして日本に伝播していることは、半島の他地域に前庭が確認されない事実から明らかになった。⁽⁷⁵⁾

高句麗地域では王陵に認められ、4世紀前半から8世紀終末まで累々と構築されている。高句麗古墳においても規範となるようなものが存在したかは定かでない。王陵の系譜については遼陽系多室墓や中国系在地塹室墳の系譜を引いている可能性もある。高句麗における前庭の初出はB類前庭で、4世紀前半に構築された輯安万宝汀1368号墳で確認される。その後4世紀後半に麻線溝1号墳、5世紀前半に高山里15号墳、5世紀中葉に中和伝東明王陵、5世紀終末に高山里7号墳、6世紀初頭に土浦里大塚古墳、6世紀前半に鎧馬塚古墳、6世紀中頃に高山里9号墳とほぼ途切れることなく相次いで構築されている。むしろ、これらは形態的に細分されるもので、縦系列ですべてがつながっているものではない。B類よりも若干遅れてA類前庭が4世紀中葉に米倉溝1号墳(將軍墓)で登場する。その後は4世紀終末に安岳伏獅里壁画古墳、5世紀前半に高山里10号墳、6世紀前半に通溝(禹山下)四神塚古墳、6世紀中頃に輯安五盛墳4号墳、湖南里四神塚古墳が相次いで構築される。上野地域で最盛期を迎える頃は以外と構築されず、7世紀代初頭の高山里1号墳構築後しばらく空白期がある。高句麗滅亡後は渤海の王陵に引き継がれ、A. D. 793年銘をもつ和龍貞孝公主墓が構築されているが、これに先立つA. D. 777年銘をもつ貞恵公主墓(敦化六頂山1 M 2号墳)もA類前庭を有する可能性は高い。

日本国内ではA類前庭が鋤崎古墳等に見られ、少なくとも同墳については高句麗からの系譜と考えるのが妥当であることが理解される。もちろん、北部九州系横穴式石室の系譜すべてを一元的に高句麗に求めることに対しては、現時点では躊躇せざるを得ない。老司古墳等には前庭が認められないからである。前庭を持たない一群は系譜的に異なったものと推定され、従来どおり漢城期の百濟に求めるべきものかも知れない。鋤崎古墳の天井部は、穹窿平天井を有する高句麗古墳に疑似させた極端な持ち送り技法を踏襲したが、技術的に修練不足だったのか、用材の問題か耐えられずに、上部の崩壊を招いている。同墳の構築にあたっては高句麗地域で直接造墓に携わった帰化人系の集団の存在を推定したい。

これらの北部九州地域における前庭の系譜は、城2号墳、別当塚東古墳、釜塚古墳、関行丸古墳と継承されていく縦系列が存在する。また、それらと前庭の起源は同じだが派生して別系列となったものが、勝浦12号墳前方部石室、汐井掛17号墳で認められる。こうした系譜は石室の変遷も考慮して、各地に波及した段階がどの段階かある程度推定することができる。例えば、若狭に認められるMT15型式期の高浜町二子山3号墳、美浜町獅子塚古墳は北部九州地域における関行丸古墳段階以降の構築と考えられる。北陸では、あまり定着しなかったと考えられるが、能登周辺地域では若干の空白期を置いてから前庭が確認されており、加賀の河田山33号墳はむしろ上野的なA類前庭が認められることから北部九州地域とは別系譜で波及している。

中国地方では類例が少ないものの、備中定北古墳は確実なA-2-a類前庭として注目される。また、こうもり塚古墳は天井石構架のない部分に石敷きを持つようでB類前庭の可能性を持つ。山

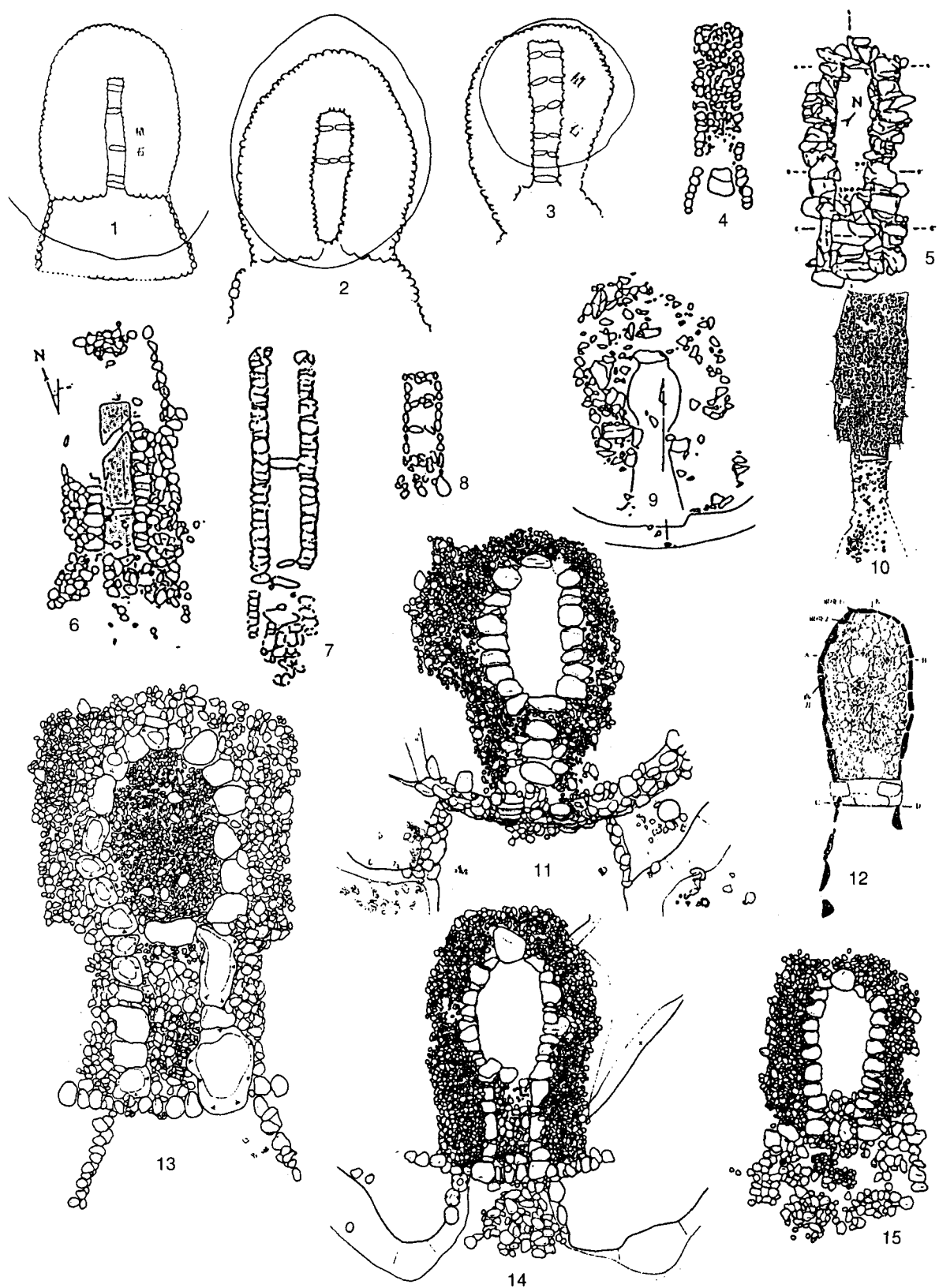


fig.12 東北地方における前庭を有する古墳（スケール不同．1．2．10は一部加筆して作図）加部（1997）より引用
1．猫谷地1号 2．猫谷地3号墳 3．猫谷地4号墳 4．反五条丸60号墳 5．和泉沢15号墳 6．長沼9号墳 7．五条丸52号墳 8．道場4号墳 9．鳥矢崎1号墳 10．鬼穴1号墳 11．色麻24号墳 12．森山4号墳 13．色麻107号墳 14．色麻108号墳 15．色麻106号墳

陰地方では岩美町高野坂 8 号墳が B 類前庭と思われる。なお、播磨周辺でも B 類前庭が確認されている。

四国では、伊予の龍徳寺山 1 号墳に B 類前庭が認められる。左片袖型を有する初期横穴式石室であるが系譜関係は不明である。

美濃・三河周辺地域で確認される B 類前庭については、高句麗との結び付きが強いものと推定される。TK10型式期には高蔵 1 号墳が構築されており、高句麗土浦里大塚古墳とは時期的に近い。但し、石室プランの類似する南大塚古墳例や、次郎兵衛塚 1 号墳などは時期が下がるものであり、直接的なものか問題も残る。これらの系譜は相模の桜土手古墳群でまとまって確認されており、その後、房総半島周辺にも派生していると考えられる。

北部九州地域から直接的に及ぼされたと考えられている志摩おじよか古墳については、釜塚古墳段階以後に位置付けられる。本墳以降、豊田大塚古墳に継承されるとする説もある。また、伊勢、伊賀、周辺に認められる前庭にも影響を及ぼしている可能性をもつが、これらは美濃からの影響とも考えられる。

中部高地へは複雑な様相で入っている。信濃はいずれも善光寺平で確認されており、三河田大塚古墳例の A-2-a 類前庭以外はいずれも B 類前庭に分類される。甲斐では、竜王 2 号墳が A-1-c 類前庭である以外は、B 類前庭に分類される。一宮町四ツ塚古墳では、まとまって確認されており、相模桜土手古墳群同様、拠点的な様相を示す。

上野地域へは B 類前庭が初期の横穴式石室と同時に入ってきている。北部九州地域よりも若干遅れるが、美濃地域とはほぼ同時期であり、これらの構築にあたっては高句麗地域で造墓にかかわった集団の介在を考えたい。また、上野地域の A 類前庭については B 類前庭よりも若干遅れるものの、今後、溯って時間差をもたなかった可能性を予測している。

東北地方の A 類前庭についてはすべて上野地域からの影響を考えている。石室胴張りプランなどにも片鱗を覗くことができ、上野地域で直接的に造墓に携わったことのある工人集団（あるいは帰化人系造墓集団）の関与を推定したい。上野地域が東国征討の拠点⁽⁷⁶⁾となっていることから、かなりの人の動きが認められ、こうした集団は同行させられていたと考えられる。

畿内周辺地域では伊賀の鹿高 1 号墳、下中島 2 号墳、筒御前古墳、小谷 1 号墳などが B 類と考えられる。伊勢、上野山古墳群や、高倉山古墳などに多く認められるほか、丹波では長者ヶ森 1 号墳に B 類前庭が確認され、池の奥 4 号墳も翼垣が短い B 類前庭に分類される。近江では湖北・湖西地域に集中して認められる。長野 2 号墳、上の山 1 号墳、越前塚古墳などのほか、天井部分を欠損するものが殆どであるものの、音羽古墳群にまとまって確認されている。丹後では入谷西 A 1 号墳のほか、大成 8 号墳、湯舟坂 2 号墳なども B 類前庭の可能性をもつ。これらの内、湯舟坂 2 号墳は天井石が無いために「ハ」の字型羨道の可能性も想定される。

畿内大和地域で前庭が受容されない理由として、畿内勢力が百濟重視の政策をとっていたことを以前に指摘した。しかし、6 世紀後半代には高句麗の勢力が衰え始め、A. D. 570 年以降は交流の記録が頻繁に文献史学に登場してくることから、これ以降に畿内地域に高句麗系の墳墓が構築されていても不思議は無いことになる。こうしたことから大和に隣接した河内の地域に、7 世紀前半代に比定される墓尾 3 号墳、イノラムキ古墳が相次いで築造されていることはそれらと合致する事例

である。

前庭の変遷過程を、高句麗地域の発生から日本国内への波及までをⅠ段階、九州地方での受容から変質および拡散をⅡ段階、上野地域にA類前庭が入るまでをⅢ段階、上野地域からA類前庭が仙台平野周辺地域へと波及する時期をⅣ段階、変質したものがさらに岩手県内北上周辺で確認されるのをⅤ段階というように画期を求めて、その波及過程を段階を追って考えてみたい。

Ⅰ段階（4世紀前半～4世紀終末） 高句麗地域で成立する。韓半島においても高句麗地域以外には認められていない。高句麗地域ですでに前庭AB両類がそろっており、殆どの形態は高句麗の段階で定型化してから日本へと波及している。今のところ初源はB類前庭で4世紀前半、A類前庭は4世紀中葉と考えられる。日本国内には初期横穴式石室と同時にまずA類前庭が4世紀終末に北部九州地域へと伝播する。

Ⅱ段階（5世紀初頭～5世紀終末） 北部九州地域に波及した前庭は、一系列程度でしか定着しない。そういった意味ではある種の独占的な状況であったのかも知れない。変質を遂げ「ハ」の字型羨道を有する志摩おじよか古墳へ5世紀中葉に伝播する。また、日本国内にB類前庭が5世紀終末頃に北部九州地域へと伝播する。

Ⅲ段階（6世紀初頭～6世紀中葉） 若狭地域にA類前庭がMT15型式期に、美濃周辺地域にB類前庭がTK10型式期に導入される。上野地域にはB類前庭がTK10型式期に、少し遅れてA類前庭が伝播している。

Ⅳ段階（6世紀後半～7世紀後半） 上野地域でA類前庭の築造が隆盛を迎える。一方、東海道ルートを経由したものが相模の桜土手古墳群や房総半島の割見塚古墳等で確認されている。これらについては美濃地域からの影響が考えられる。甲斐では四ツ塚古墳群にB類前庭がまとまって入る。同様に上野地域から仙台平野周辺地域へと伝播するがこれも拠点的である。

Ⅴ段階（7世紀終末以降） 上野地域では一部で古墳が築造されている可能性をもつがほぼ終焉を迎えている。しかし、古墳前庭部における祭祀行為は依然活発に行われている。猫谷地古墳群では在地色に変質を遂げたものが認められる。

⑤……………横穴式石室への影響

(1)前庭の系譜からみた 横穴式石室伝播の一試論

北部九州地域に初めてもたらされた日本の横穴式石室の起源については、樋口隆康氏⁽⁷⁷⁾、白石太一郎氏⁽⁷⁸⁾をはじめとして、百済地域に系譜を求める考え方が支配的であった⁽⁷⁹⁾。その後も、永島暉臣氏⁽⁸⁰⁾、小田富士雄氏⁽⁸¹⁾も漢城期百済に一元的な系譜関係を求めて近年に至っている。しかし一方で、柳沢一男氏は漢城期百済に求めつつも、近年は高句麗の影響も捨て難いことを認めており、石室のみの形態論からでは状況の把握が困難なことが明らかになった。それらの考え方の根底には、潜在的な即成概念として、当時の日本と百済の政治的つながりが見え隠れしており、社会、文化面にまで影響を及ぼしているとする先入観はこうした友好関係に裏打ちされた趨勢に、示唆されていたとは言えないだろうか。

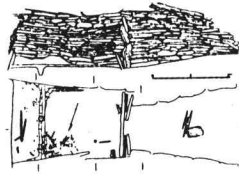
高句麗から最初に日本に伝来したと考えられる谷口古墳や、鋤崎古墳の規範となった古墳は、時期的に考えると、未発達な翼垣を付帯し、天井部を極端に持ち送る穹窿平天井を有する安岳伏獅里

壁画古墳あたりと考えられるが、まだ調査されていない未知なる古墳があるやもしれない。但し、いずれにしても、地下式の要素は無いと考える。高句麗にはこの段階で四阿天井塚古墳、折天井塚古墳、太王陵古墳、禹山下41号墳、將軍塚第1陪塚とつながる王陵の系譜に半地下築造様式が確認されているが、どうも系譜的には北部九州の事例とは異なるようである。また、禿魯江流域地域では魯南里南坡洞10号墳、同30号墳、同31号墳などに見られる羨道床面が玄室床面より高い、有段羨道式石室も確認されているが、時期的に5世紀中頃と新しいようである。これら墓壙内に設定する件については、あるいは構造状の問題も関連するかも知れないが、はた目には、それまでの伝統的な竪穴式石室の築造方法で構築し、石室の外見だけは高句麗的な要素を取り入れて、竪坑の中に無理して前庭まで押し込んだとも見られる。埋葬主体部は新来の構造によるが、墳丘形態は伝統的な前方後円墳を採用している点からも、これらの錯綜した背景が垣間見えと言えよう。

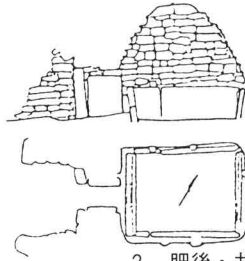
おそらく、全国の横穴式石室の規範となったであろう北部九州の状況は、各地の横穴式石室に影響を及ぼした可能性が高い。城2号墳までは短いながらもあった羨道が別当塚東古墳段階で消失する。これを手本として真似て築造した古墳にあっては羨道が無いことが常識となり、ある意味では、風変わりな横穴式石室が全国へ波及した。しかし、こうした羨道の消失という変遷は北部九州の中だけの変遷過程で成立したものではなく、途中で高句麗からの第二波が押し寄せてきた結果、こうした流れに傾いていった可能性がある。というのも、高句麗地域でも羨道の矮小化という傾向は認められており、4世紀代の古墳にはすでに萌芽の兆しが現れている。例えば前庭は付帯しないが太王陵古墳や四阿天井塚古墳でも確認され、5世紀代にはこれらと系譜は異なるが寺洞古墳、禹山下41号墳といった全く羨道が消失した事例も確認されている。どの段階で、どれを規範として九州地方に波及したかは明らかでないが、外からのイレギュラーな波によっておもわぬ方向へと変遷していった可能性は否定できない。

(2)「ハ」の字型羨道の出現

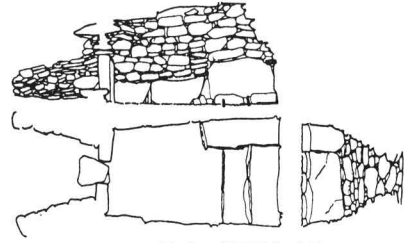
前庭と羨道は接してはいるものの、羨道は埋葬主体部の中にあり、その外区に展開される前庭とは一線を画されているように思える。しかし、本来のあるべき姿が形骸化していく過程において、中には一線を画せない事例が認められている。これらの事象と密接な関係にあると思われるのがここで問題とする所謂「ハ」の字型羨道である。(fig. 13参照) 一般的に平面形が開き気味となる羨道プランを呼ぶが、天井石の構築する部分が途中までの事例もあり、床面平面図からは羨道と前庭の区分が難解な例も多い。これらの中には上半部が欠損した石室では全く見分けがつかない事例も存在する。「ハ」の字型羨道は、前庭が発生したと考えられる高句麗地域ですでに認められるほか、それらの影響を受けていると考えられる扶余百濟地域でも認められ、陵山里東古墳群周辺や高霊古衙洞古墳（一部墓道の可能性をもつ）で石室が平面的には前庭状のやや裾開きの形態を示す事例が確認されている。これらはB類前庭に天井石が構築された形態を呈するものもある。日本では、北部九州では筑前の橘塚古墳、綾塚古墳、楠名古墳、日拝塚古墳などに見られ、伊勢平田古墳群は志摩おじよか古墳の影響とも考えられる。三河では天神山2号墳、洲崎山2号墳ほかで確認され、畿内では巨勢山タケノクチ16号墳などに認められている。関東では下野に多く、西坪3号墳、中村大塚古墳、石下10号墳などで確認されているなどかなりの広域わたって認められる。⁽⁸⁴⁾これらは天井石の破壊されているものでは誤った見解を示す可能性もあり、微妙な相違で分類しているので、当初の構築形態を復原しない限り、危険な要素



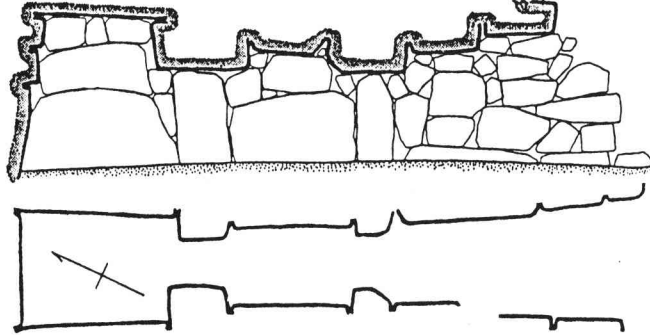
1. 志摩・おじよか古墳



2. 肥後・井寺古墳



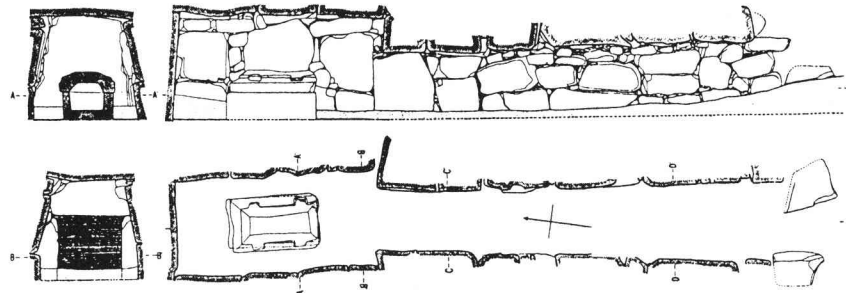
3. 筑後・関行丸古墳



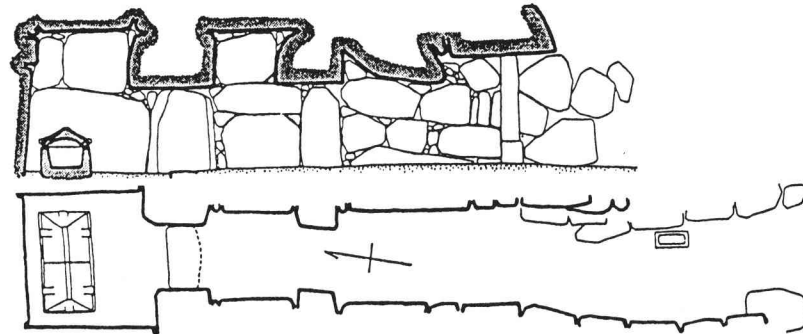
4. 筑前・橘塚古墳



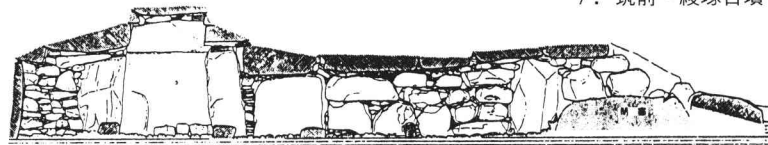
5. 筑前・日拝塚古墳



6. 吉備・隼佐大塚古墳



7. 筑前・綾塚古墳



8. 筑前・楠名古墳

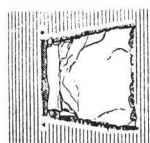


fig.13 前庭と「ハ」の字形羨道

をはらんでいることも否定できない。一方、A類前庭の形態で殆どに天井石が構築するものとして、志摩おじょか古墳に代表される。おそらく高句麗では独自に前庭の形態から影響を受けて変形した羨道が普及したものと思われる。北部九州に伝播した初期横穴式石室では前庭の形で入っていることから、高句麗の「ハ」の字型羨道が日本に伝播したと考えるよりも、国内で独自に変質する中で天井石が前庭の方まで構築されるようになり、「ハ」の字型羨道が成立していったものと推定される。これらは、時期と地域は離れるが、栃木県や東北地方の一部にもこうした形態の羨道が認められているので古墳の築造された地域ではほぼ全域にわたって普及しているものと推定される。B類前庭の形態に天井石を構築させる事例などは7世紀代となってから隆盛を迎えると考えられるが、管見では日本国内でのB類前庭の出現は、北部九州地域で5世紀終末～6世紀初頭には伝播しているので、これ以降の時期にならば、どの地域で認められても不思議はないことになる。いずれにしても九州から近畿、北陸、東北と広範囲に確認されており注目される。

(3)多室墳の系譜

遼東地域における後漢から北魏の墓制は古くは鳥居龍蔵らによって型式分類されている。一般に遼陽系多室墓とよばれているこれらの構造は墓道、後室、槨室、前室、耳室（左室、右室）、回廊などから構成される。これらの影響化に成立したと考えられる安岳3号墳が退化する過程において有耳室双室墳や有龕単室墳などが出現するものと考えられる。こうした墓制も百濟、新羅、伽耶地域では認められないものでありひとつの特徴となっている⁽⁸⁵⁾。

いままで、北部九州地域の横穴式石室の系譜に高句麗の影響が色濃く入っていることを指摘してきたわけであるが、それらを裏付ける資料として、これらの系譜を引くと考えられる事例を提示したい。(fig. 14参照) 北部九州地域は横穴式石室の複室構造が多い地域としても著名である。しかし、これらの中には日本で一般的に認められる複室構造とは違った高句麗的な有耳室双室墳石室あるいは、有龕単室墳の末裔と呼べる事例も含まれている。柿原古墳群は7世紀代を中心とした古墳群であるが、特にこれらの特徴を出しているのはI地区4号墳である。前室の奥壁側に前に食い込んだ形状を呈しており、単に横に張り出したのではなく、別室としての区画の意識をもって構築されている。高句麗地域の古墳ではこれらを「翼室」と呼んでおり、龕の一種と考えられている。また玄室との間には仕切りがあって甬道を意識したものである。高句麗地域のこれらの構造はすべて切石造りなので精緻な形状を呈するが、その末裔たちが故郷を想起して在地の石材で構築したものがこのような形に造形されたと考えられる。これらの形状を有する石室については、高句麗地域でも、高山里古墳群などでは6世紀後葉まで残るので、九州の事例と直接つながる可能性も考えられる。但し、最末期に位置づけられる高山里9号墳は翼室が「冂」字形なのに対して、柿原I地区4号墳は「L」字形を呈しており、柿原のタイプは、高句麗地域でも比較的古い事例に多い。江西蓮花塚古墳や江西台城里1号墳などに認められるもので、管見ではこれらはいずれも5世紀代以前に比定されていることなど問題も残る。しかし、6世紀終末に位置付けられる朝倉狐塚古墳は前室入口面に入口から向かって左側に^{とぼそ} 柩があり、木製の片開きの扉があったと推定されている。本墳の前室部は、高山里9号墳と同じ向きの翼室を意識しているとも考えられ、これらの成立には高句麗地域の影響が深く関与しているとともに、この時期新たに高句麗系帰化人達によってもたらされたことが考えられる。本古墳群では石室と共にやはり高句麗系と考えられる前庭を有する古墳も多い

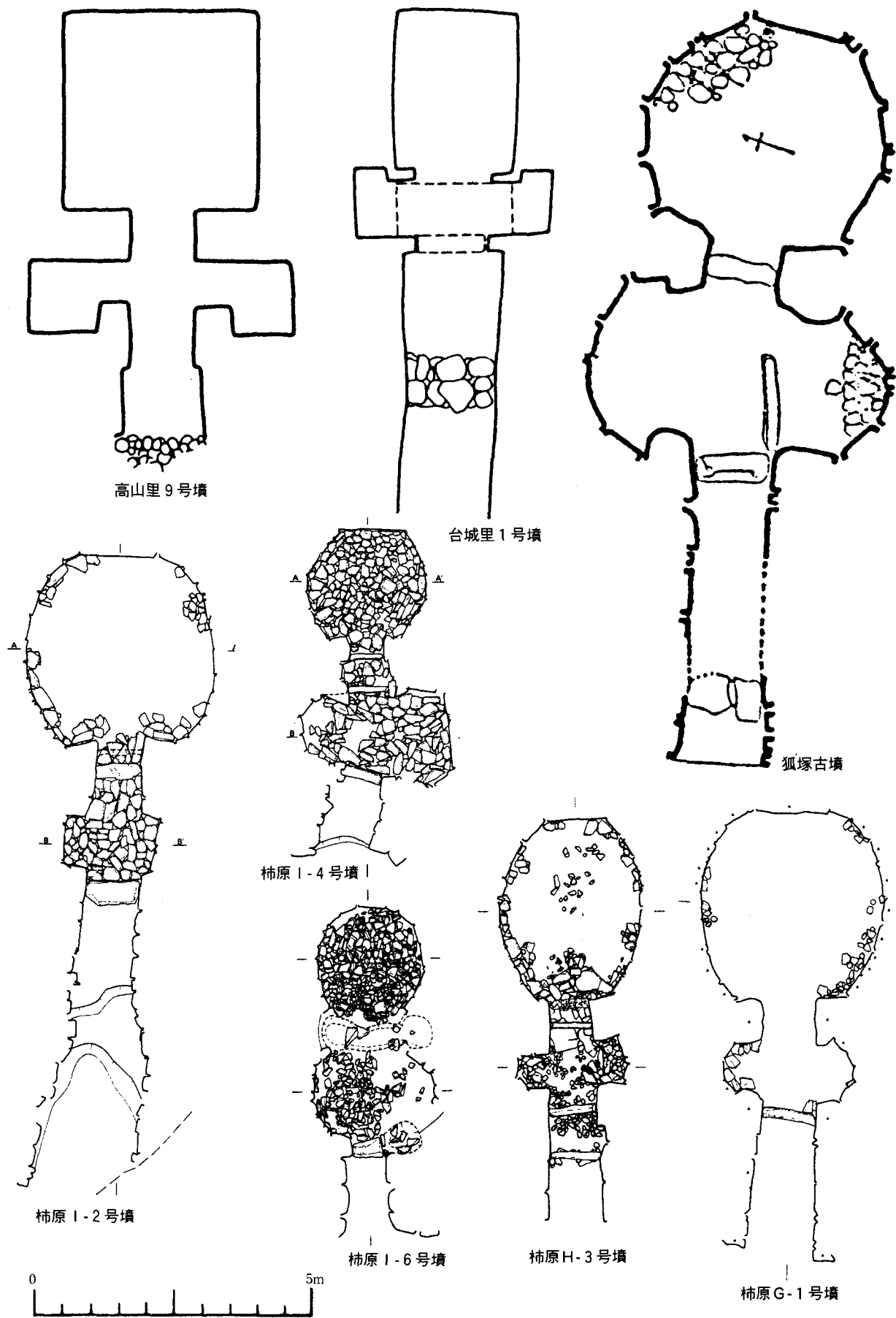


fig.14 翼室をもつ古墳と九州の複室墳

ことから、これら二つの要素に共通する系譜関係については偶然ではないと考えている。

⑥……………前庭の機能

(1)閉塞部分としての前庭

尾崎喜左雄博士は上野地域の調査事例から、この地域に特徴的な付け基壇を有する古墳について、「墳丘が完成した以後に基壇を付け足しているために、石室出入口まで埋まっており、追葬する際に、石室内への出入りに難渋することになる。このために底面矩形で上方の開いた通路（B類前庭）を石室出入口の前面の基壇に相当する部分を開けて築造した」として、B類前庭の出現過程を墓道の要素で捉えている⁽⁸⁶⁾。また、これらの初期の事例として、粕川村壇塚古墳では石室を完成させた後に、羨道部の入口部を破壊除去して前庭床面を構築していることが指摘されており、しどめ塚古墳、高塚古墳なども前庭を後で増設している事例とされている。さらに、業平塚古墳の場合は、付け基壇が石室出入口の高さを越えていて、基壇面には埴輪列が認められている。前庭の有無は不明であるが、出入口を永久に閉塞した後に基壇を増設していることが推定されている。こうした付け基壇の古墳において横穴式石室の便を計って設定されたものが前庭の成立要因であると尾崎博士は想定されている。これらの古墳における前庭の付設時期は、付け基壇の増設よりも工程上は後出するはずであり、石室の閉塞→基壇の増設→前庭の付設といった工程の序列を復原することができる。従来こうした状況は工程上の前後関係は示せてもそれらに時間差があったことの証明にはならなかった。しかし、そのあたりを大江正行(1990)『本郷的場古墳群』において出土遺物から実証されている⁽⁸⁷⁾。本郷的場D号墳では、石室石組根石よりも前庭根石の方が高い位置にあり、石室根石のレベルより上に客土して前庭根石を構築している。そのことで前後関係は明らかであるが、その客土中の遺物と前庭内で供献されていた遺物との間で接合関係が認められている。それらの遺物の時期から前庭の構築は8世紀前半代と推定され、6世紀後半代に築造された古墳に時期を隔てて前庭のみを追加していることが明らかになった。このような築造から時間を100年以上も隔てた増設事例がはたして一般的なものか現時点では明らかにしがたい。また、本墳では前庭における最終祭祀の終了後に河原石で充填され、前庭部の閉塞を行っている可能性がある⁽⁸⁸⁾。上野地域の調査例では、B類前庭の一部に前庭部分にまで閉塞石が及んでいる事例は確認されているが、石室閉塞時に同時に閉塞されている可能性も否定できず、これらのタイムラグが問題となっている。一般的に、A類前庭の調査事例では殆どが前庭部分に自然堆積土が流入して埋没しており、墓前における祭祀行為の終焉後は放置されているのが普遍的であると考えられる。しかし、東北地方の猫谷地・五条丸古墳群などでは前庭部分に河原石が詰められている事例が確認されており、前庭部が剥き出しのままでは盗掘されやすいし、何よりも中途半端で古墳としての外形を損ねている。これらの事例は厳密な調査例がないため、現時点ではあくまでも推測の域を出ないが、祭祀行為を終了した時点で前庭部を閉塞する場合もあったようであり、古墳築造当初の理念からすれば閉塞されることによって初めて古墳が完成したとも言える。実際には、前庭が機能を停止するのは古墳築造から時間を経たものが多く、仏教思想の浸透により古墳築造時の価値観とはかなり隔たった思想の変遷が予想される。仏教思想における薄葬化の傾向は、実際の火葬墓の調査例からも認められるところであり、構造において簡素なものが多く、盗掘を意識して

いるとは到底考えられない。またこの頃には前庭部分において火葬墓が構築される事例もあり、社会思想の急激な転換に民衆は戸惑ったのではなかろうか。⁽⁹¹⁾

(2)墓前祭祀の期間

古墳の前庭部から土器類が出土する事例は普遍的である。これらをすぐに古墳の築造年代に結び付けることについては問題が残る。石室内の副葬品等と比べて年代が新しい場合が多く確認されているからである。従来、これらは、追葬の際に行われた祭祀行為と解釈されるケースが多かった。上野地域では8世紀後半、もしくは9世紀初頭の遺物を出土している場合もあり、この時期まで追葬行為が行われているとする点については懐疑的な意見が多い。⁽⁹²⁾

これらについては、すでに甘粕健（1969）で前庭部から出土した土器の年代については墓前祭祀の継続期間の下限を示すものであることを考察されている。⁽⁹³⁾これに若干の補足をするならば、前庭部から出土した最新の遺物が祭祀行為の下限とすべきと考えている。こうした早い段階で提言されている重要な発言も現在の研究では全く無視されている感がある。前庭部としたのは、しっかりした区画を設けていなくても石室前面＝前庭部で祭祀行為を行っていることは、すでに松本浩一（1976）によって指摘されているところであり、実際に前庭の区画が無くても、石室前面部分から土器を出土する例は、有瀬2号墳、萩塚古墳、内堀 M-1 号墳、後二子古墳など枚挙にいとまのない程、確認されている。また東北地方の古墳でも石室前面部分の周溝内から遺物を出土する例は多く確認されている。これらの出土遺物中には比較的新しい遺物を含んでいるケースが多いと認識しており、得てして古墳の年代観に混乱をきたす要因となっているようである。おそらく最終の祭祀行為であるので、それ以前の遺物を片付けるといった行為が行われている可能性もあり、これらの遺物を取り扱う際の慎重さを要求されている。一般的に石室前面部分から多量の土器が出土すると、すぐにそれから古墳の年代観を求めている事例が多いようであるが、あくまでも古墳が機能していた最終の年代と捉え、古墳築造の年代はそれよりは古いという参考程度にしか用いられないことを調査者は再認識すべきである。

前庭の使用期間については松本浩一（1976）において上野地域の調査事例から考察されている。堀越古墳では古墳の構築は7世紀終末で、前庭出土土器は8世紀初頭に位置づけられ、50年間の使用期間が想定されている。しどめ塚古墳は7世紀前半に構築され、前庭出土土器は8世紀初頭で、やはり50年間使用されたとしている。これらの古墳築造年代は当時の石室編年観に基づいて行われたもので、現在の研究では再検討を要すると考えられる。近年、前掲の本郷的場 D 号墳の報告では大江氏によってこれらの参考になる試みがなされている。石室、前庭出土遺物すべての年代観を「古墳別土器の消長概念」として図化している点である。⁽⁹⁴⁾これにより、本郷的場 D 号墳は、6世紀後半に築造され、⁽⁹⁵⁾7世紀後半、8世紀初頭の追葬を経て、8世紀中葉まで祭祀行為がなされたと推定することができる。これらの祭祀行為はいかなるものであったのだろうか。前庭部における祭祀の復原を考察してみたい。上野地域の調査事例では、堀越古墳の前庭部は中央に仕切りがあり、それから奥には全面石敷きがあった。土器類はすべてそこからの出土で、左右石組に接して土師器・須恵器類が出土している。かね塚古墳でも、石室入口部で2ヶ所に別れて土師器、須恵器破片が出土している。本郷的場 D 号墳では、須恵器の大甕と坏蓋があり、いずれも翼垣に接して確認されている。金井古墳では、土師器破片と焼土が確認されており、蔵王塚古墳では左壁に接して土師器

坏が重なって出土している。これらは広い前庭区画があるにも拘わらず、出土遺物が壁に接した部分から出土することが多いことが指摘される⁽⁹⁶⁾。出土遺物の多くは石室内と違って完型に復される比率が低いことから、おそらく片付け行為によって端に置かれた遺物類であった可能性は高い。また、前庭及び前庭部で火を燃やしていた痕跡は、金井古墳、後二子古墳などで確認されている。一般に、埋葬時に行われる儀礼行為については、文献史学から「ヨモツヘグイ」に関連した埋葬時に石室内で死者に黄泉国の食物を供する儀礼や、「コトドワタシ」と呼ばれる、石室の封鎖に際して死霊を石室内に封じ込める呪的儀礼などが推測されていた⁽⁹⁷⁾。前庭部で火を焚いた痕跡が頻繁に確認されることから、これらを「ヨモツヘグイ」に関連した墓前炊飯に短絡的に結び付けた説もあるが、これらは石室内や閉塞部分で行われる葬送儀礼であって、前庭で行われた祭祀行為とは一線を画すべきものと考えられる⁽⁹⁸⁾。前庭部は葬送儀礼を行う場所では無く、埋葬から時間を経てから行われる、むしろ追善供養に近い祭祀行為を行った場所であったと考えられる⁽⁹⁹⁾。

《付記》 本稿の発端は、1992年2月15日に前橋市立図書館生涯学習講座における講演要旨と同年3月15日に前橋市昭和町自治会の依頼により行った生涯学習講座における講演要旨を骨子とするもので、当時執筆した第I章の部分を大幅に加筆訂正したものである。特にその後、東北地方や美濃地域の古墳前庭に接することができ、前庭構造の日本各地への拡散状況を目の当たりにすることができたことは、これらの構想のヒントになっている。本稿を執筆するにあたり、国立歴史民俗博物館の白石太一郎、杉山晋作の両先生をはじめとして、石川正之助、大江正行、太田博之、車崎正彦、桑原稔、小森哲也、志村哲、塚田良道、橋本博文、藤沢敦、古谷毅、松村一昭、松村永子、和田晴吾の諸先生ならびに伊勢崎市教育委員会、前橋市教育委員会、群馬県古墳時代研究会、埴輪研究会の諸氏には有意義な御教示をいただいた。また、松島榮治先生には公私ともに御指導いただき、日頃の学恩に改めて感謝申し上げる次第である。

(1998年7月31日稿了)

註

- (1)——鬼頭清明(1989)「七－八世紀における上野国の古墳と氏」『東洋大学文学部紀要』第42集
- (2)——加部二生(1997a)「群馬県内出土の蝦夷関連遺物」『遺物からみた律令国家と蝦夷』東日本埋蔵文化財研究会
- (3)——松本浩一(1976)「群馬県における横穴式石室の前庭について」『古代学研究』第80号
- (4)——尾崎喜左雄(1971)「墓前まつりを推定する」『歴史読本』第16巻第8号
- (5)——牛丸岳彦(1996)「乙塚古墳と段尻巻古墳について」『専修考古学』第6号
- (6)——本稿でいう高句麗とは旧楽浪郡域も含めた総称であり、同様に上野には現在の埼玉県北部、栃木県足利地域も含めている。便宜上使用するが、当然当時の呼称

ではない。また、本文中で使用している北部九州地方の中には肥前・肥後の周辺地域も含んでいる。

- (7)——加部二生(1992a)「墓参り考－古墳前庭部にみる墓前まつり－」『前橋市立図書館生涯学習講座講演要旨』前橋市立図書館および、加部二生(1992b)「お墓参りを考える－古墳前庭部にみる古代の墓参り－」『前橋市昭和町自治会生涯学習講座講演レジュメ』前橋市役所

(8)——北京外語大学客員教授(当時、豊田工専教授)の桑原稔先生(建築史)に御教示いただいた。なお、前掲註(2)文献および註(7)文献の他に同様の骨子で発表したものに、下記の文献がある。

加部二生(1984)「尾崎喜左雄博士の研究と業績－特に横穴式石室の建築学的用語の問題－」『古墳部会例会

発表要旨』群馬歴史考古同人会

加部二生 (1987)「横穴式石室の前庭について—各部の建築学的名称について—」『礎』11号

加部二生 (1997b)「(続)横穴式石室凡例について」『群馬県古墳時代研究会発表要旨』群馬県古墳時代研究会

加部二生 (1998)「横穴式石室凡例について」『群馬県内横穴式石室 (西毛編)』群馬県古墳時代研究会

(9)——前掲註(5)文献でも指摘されているとおり、羨道壁材は内傾しているものが多いのに対して前庭部は外傾していることが多く、用語として明確に線引きすべきであると考ええる。

(10)——建築学的名称としては、「袖壁」、「翼壁」でも誤りではないことは前掲註(7)文献で述べたとおりである。

(11)——桑原稔先生の御教示による。

(12)——新納日本古典文学全集55 (1996)『太平記』小学館 (fig. 2) 上挿絵についても同文献によった。

(13)——前掲註(7)文献

(14)——尾崎喜左雄 (1964)「横穴式古墳の基壇と所謂前庭」未発表原稿であったが、尾崎先生著書刊行会編 (1977)『上野国の古墳と文化』に初めて掲載された。この点については石川正之助氏に御教示いただいた。

(15)——本分類は基本的には加部二生 (1997a) に基づいて分類しているが、旧稿で曖昧であった部分を新設している。旧稿と区別するためにA型をA類に、B型をB類に置き換えている。

(16)——そうした意味では九州地方で看取される前庭はすべてA類の範疇で捉えている。

(17)——前掲註(8)文献

(18)——東潮 (1993)「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第47集

(19)——朝鮮総督府 (1915)「漢王墓二・高句麗時代乙・平壤長安城地方」『朝鮮古蹟圖譜』第二冊

(20)——高橋健自 (1924)『古墳と上代文化』雄山閣

(21)——尾崎喜左雄 (1950)「群馬縣柏川村壇塚古墳調査報告」『群馬大学紀要人文科学篇』第1巻

(22)——菊地義次 (1955)「南部地方横穴群に就いて」『古代』14・15合併号 早稲田大学考古学研究会

(23)——菊地義次 (1962)「三鷹市大沢御塔坂Ⅱ・Ⅲ号横穴」『古代』38 早稲田大学考古学研究会

(24)——大川清 (1967)『落合の横穴古墳』

(25)——前掲註(14)文献

(26)——尾崎喜左雄 (1966)『横穴式古墳の研究』吉川弘文館

(27)——坂詰秀一 (1974)「梵天山横穴墓の性格」『武蔵梵天山横穴墓』雄山閣

(28)——なお、唐の御所横穴墓については南関東の一般的な横穴墓の前庭とは異なり、A類前庭の範疇で捉えて問題ないと思われる。このほか、古墳の前庭と形態的には遜色ない例も存在するがここでは省略する。これらの用語については墓(古墳)で先に用いられた学史を尊重して、窠跡の用語を訂正すべきであると考えている。

(29)——甘粕健 (1969)「我孫子古墳群の編年の考察」『我孫子古墳群』

(30)——前掲註(4)文献

(31)——前掲註(3)文献

(32)——こうした構造物に設計図のような企画があったと想定することは現在では誰しもが認めるところである。しかし、実際行われているこれらの復元作業を見ると、小さく縮めた図面を机上で作業したものが殆どであり、大縮尺における図上の操作は殆どのものを当てはめてしまう危険性を考慮すべきである。また、企画線であるならば当然、根石の段階で設計しなければならないはずなのに、この段階の作業では、石室壁石の途中であったり、破壊古墳の場合は取る位置がそれぞれ異なった次元の違った測定部位を同列で扱うといった操作がおこなわれていることに懐疑性を強める。

(33)——これらの尺度論についても、現在の研究では高麗尺の換算地自体が誤りであると考えられており、それらに基づいて編み出された編年観は全く意味をなさない。小泉袈裟勝 (1977)『ものさし』法政大学出版局

(34)——なお、松本浩一氏はこの中で、尾崎喜左雄 (1966) の編年研究を一步進め、玄室長と幅の比率で編年が追えるとしている。全体に玄室長に比して幅の狭い石室から広い石室へと移行して行き、前方後円墳と埴輪の消滅は1.5で、前庭をもつ石室比は2.5以下、中でも2.0以下が多いとしている。先に述べたようにB類前庭は富岡5号墳や高塚古墳といった群馬県内では比較的初期段階の横穴式石室にも確認されるものであり、時間的なものではないことは明らかである。これに、前方後円墳や埴輪の消滅といった時期的な問題も同レベルで扱っていることから現在の研究には使えないものとなっている。この数値の大まかな傾向は、石室の巨大化を意図するものと捉えられる。

(35)——前掲註(14)文献

(36)——大江正行 (1990)『本郷の場古墳群』群馬県埋

蔵文化財調査事業団

(37)——松本浩一（1976）における前庭の取り付け方の分類は下記のとおりである。

- A 類 基壇内につく。蔵王塚古墳など
- B 類 前庭部分のみ基壇あり。庚申 B 号墳、本郷的場 D 号墳など
- C 類 墳丘削って設ける。堀越古墳、虚空蔵塚古墳、横沢Ⅱ号墳など
- D 類 山寄せ傾斜地を利用して前庭設定。金井古墳、山ノ上西古墳など
- E 類 簡単な石積後ろにおさえる土。かね塚古墳、御部入 7 号墳など

(38)——大和久震平（1976）「切石積み横穴式石室」『江上波夫教授古稀記念論集考古美術篇』山川出版社

(39)——土生田純之（1983）「東大阪市イノラムキ古墳をめぐる」『古墳文化の新視角』雄山閣

牽子牛塚古墳の前庭部は墳丘図を見る限り確かに前庭状に窪んでいる。しかし、石室前面部分にいれられたトレンチ断面からは石室床面よりも高い位置まで墳丘版築が残存している。前庭を閉塞終了後に構築することは外の事例からも工程上証明されているものであり、当然のことであるが、版築上に前庭床面が構築されているとすると、袖垣に相当すると考えられる石槨護石が袖垣の役目を失ってしまう。いずれにしても前庭の存在を想定するのは、石室前面部分の覆土が完全に剝がれて、袖垣、翼垣が完全に現れた段階でも遅くないと考えられる。なお、同書の中で土生田氏は宝塚市中山荘園古墳の石室前面部分も前庭と考えておられる。報告書で見ると、確かに横穴式石室の変形な羨道部分から左右に広がって袖垣部分の列石が認められており、土生田氏は南傾斜を持つ貼床状の前庭部と記載されている。石室前面部分の断面図を見ると、71層が袖垣下部から平坦な面を構成しているが、報告書本文を読むと、羨道閉塞石の設置後に茶褐色と灰褐色の土を交互につき固めた極部的な版築面があると述べていることから、土生田氏が指している面はこの下の79層と考えられる。この層位の下面はかなりの傾斜をもっていることが理解され、むしろ墓道的な要素が強いものと考えられる。また、右袖垣に相当する部分の延長にも列石は連なって外側の列石と繋がっており、左側も等高線間隔が細かいことから、本来は左袖垣が伸びて外側の列石に繋がって左右対称の形態を呈していた可能性が高い。石室南側は外側の列石が突出して正八角形にはならない形状を呈し、この列石と袖垣に囲まれた区域は前庭部と呼ぶよりは帆立て貝形古

墳や造り出し付き円墳などの張り出し部に相当するものと考えられる。

(40)——前掲註（8）文献

(41)——愛知大学日本史専攻会考古学部会編（1988）『西三河の横穴式石室』資料編

(42)——右島和夫（1989）「東国における埴輪樹立の展開とその消滅」『古文化談叢』第20集

(43)——例えば、上野地域でも、伊勢塚古墳、平地神社古墳、戸塚神社古墳、芝宮81号墳、蔵王塚古墳、榛東村39号墳、吉田村 2 号墳、蟹沼東15号墳、同17号墳、同18号墳、同25号墳、奥原 3 号墳、奥原53号墳、少林山台 2 号墳、同17号墳、石原稻荷山古墳、清音 1 号墳、同 3 号墳、生品蛇塚古墳などの 6 世紀代古墳で A 類前庭は確認されている。

(44)——前掲註（36）文献参照。なお、前庭の学史について触れておられる大江正行（1990）「検出された遺構と遺物」『本郷的場古墳群』の42頁で石室前特殊構造の出典文献名を尾崎喜左雄（1954）「横穴式石室編年への一考察」『史学会報第五輯』としているが、これは同論文が再録されている尾崎先生著書刊行会編（1977）『上野の古墳と文化』の中で次ぎに掲載されている論文、尾崎喜左雄（1963）「横穴式石室平面図形の企劃」原典掲載誌『考古学雑誌』48巻第 4 号の中で記述されているのを誤認していると思われる。

(45)——調査担当者の松村一昭、松村永子氏の御教示による。赤堀町教育委員会（1998）『五日牛稻荷山古墳現地見学会資料』

(46)——上野恵司（1992）「上野・切石石室小考」『考古学論究』第 2 号立正大学考古学会

この中で、羨道高指数（羨道高÷奥壁高×100）及び羨道幅指数（羨道幅÷奥壁幅×100）による編年を行っているが疑問な点が多い。例えば、羨道高指数においては、初期横穴式石室に至っては天井部が平坦な事例が多いはずで（右島和夫1983参照）、指数が高いものが古いはずなのに、安楽寺古墳をはじめとして、めおと塚古墳、蛇穴山古墳、宝塔山古墳等の方が前二子古墳、正門寺古墳等よりも高い指数となっている。個々の古墳の年代観についても懐疑的なものが多く、参考にならない。

(47)——土生田純之（1992）「横穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究』7 雄山閣

(48)——三河考古学談話会編（1994）「東三河の横穴式石室資料編」『三河考古』第 6 号

(49)——前掲註（18）文献

(50)——前掲註（5）文献

(51)——前掲註(2) 文献

(52)——前掲註(8) 文献

(53)——鹿田雄三(1992)「赤城山南麓における群集墳成立過程の分析—群馬県伊勢崎市蟹沼東古墳群を中心に—」『研究紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団は伊勢崎市蟹沼東古墳群の前庭を型式分類して大きく5タイプ9類型に分類している。ただし同一型式の中でも埴輪を伴うものは別類型にするなど、異なった要素を持ち込んでいるため純粋な型式分類とは言えない。さらに、遺物の年代観等を考慮して実年代を比定しているが、全く信憑性にかけるため本文中では省略した。また、鹿田雄三(1995)「前庭をともなう古墳の編年—赤城山南麓における後期群集墳の動向—」『研究紀要』12 群馬県埋蔵文化財調査事業団では(鹿田1992)によって分類された前庭型式A～Eタイプとは別に新たにⅠ～Ⅴ期を設定し、各期に該当する古墳は旧稿のタイプを分解して各期に当てはめた。これは型式が時期を跨がって存在することと理解されるが、Ⅰ～Ⅴ期の画期を求めるについては、鹿田氏の言うところの周堀の形態による編年?と、埴輪その他の遺物の情報を加味して操作したもので、すでに当初設定した型式の概念をかなり逸脱したものとなってきた。この時点で出土遺物を優先に各期に当てはめていけばもう少しまともなものになっていたとも思われるが、ここで周堀の平面形態を重視している。その点が一番問題で、この形態は、調査に至るまでの耕作等による削平で結果的に改変されたものも多数含んでいることを熟慮する必要性があろう。例えば、荒砥二之堰遺跡例では、写真から見ても遺跡の残り具合が悪く、現状の形態が築造当初の状況を保っている保証は無いことが理解できる。特に顕著なのは報告書PL29の7号墳で、報告者も実際は全周していたと考えているのに、図上の仕事だけで、北側を掘り残した扶状に分類している。おそらく、同古墳群で周溝が無いとされる1, 8, 9, 11, 15, 16, 17, 18号墳等も全周はしないかも知れないが当初は浅い周溝が巡っていた可能性は否定できない。勿論、周溝が切れる古墳の存在のすべてを否定するものではないが、調査時点で旧表土の復元ができない限り不可能なはずなのに、見かけの形状で分類を行い、剩えその形態変化から編年まで行うことが鹿田氏の言うような「有効な手段」とは決して思えない。また、仮にこれらの周溝が切れていたとしても、それらは個々の古墳群の形成過程の中でケースバイケースでおこる事象で、隣接する2基の前後関係を読み取る参考には成り得ても、異なるそれぞれの古墳群を比較して、例えば、「扶状周溝だから7

世紀中頃に比定する。」などという編年が成り立つはずがない。仮に、不正形の周溝や切れるタイプに7世紀の時期が限定できるとするならば、地藏山古墳群で前庭をもたない6世紀代の古墳や、右島和夫氏が提唱されている初期群集墳や4世紀代の周溝墓群に認められる事例等はどう説明するのであろうか。参考までに遺物等の年代観から比較すると、蟹沼東古墳群では鹿田Ⅴ期に比定されている周溝の無い64号墳や鹿田Ⅳ期としている10号墳から6世紀代の須恵器を出土している。荒砥二之堰遺跡では、報告書に出土状況等の情報が明記されていないので、無批判で使うのは危険かもしれないが、すべて古墳に伴うと仮定すると、鹿田Ⅲ期に比定されている4, 6, 7号墳等は鹿田Ⅰ期に溯る。地藏山古墳群では6世紀代の赤堀村18号墳を7世紀後半に比定している。以上のように、極端な例では100年以上の開きを持つものもあり、これらの年代観を前提として、その上に展開される机上の空論は全く無意味であることから本文中では割愛した。なお、袖垣部分に「袖壁」の用語を使っている件についても、学史的に混乱を招くので相応しくないことは以前に指摘したとおりである。

(54)——前掲註(18) 文献

(55)——辛占山(1992)『桓仁米倉溝高句麗“將軍墓”』遼寧省文物研究所

(56)——東潮・田中俊明(1995)『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社

(57)——李殿福1964「吉林輯安五監墳四号和五号墓清理略記」『考古』1964年1期

李殿福1984「吉林集安五監墳四号墓」『考古学報』1984年1期

(58)——前掲註(18) 文献

(59)——李殿福・西川宏 訳(1991)『高句麗・渤海の考古と歴史』学生社

(60)——前掲註(18) 文献

(61)——郭文奎1973「和竜渤海古墓出土的幾件金飾」『文物』1973年8期

(62)——樫本亀次郎・野守健(1933)「永和九年在銘土專出土古墳調査報告」『昭和7年度古蹟調査報告』1 朝鮮総督府

(63)——前掲註(18) 文献

(64)——魏存成(1992)「高句麗考古学文化の基本特徴とその展開」『高句麗の都城遺跡と古墳』高句麗都城制・日朝文化学術研究団記録

(65)——前掲註(56) 文献

(66)——前掲註(18) 文献

- (67)——前掲註(18) 文献
- (68)——羽曳野市観音塚古墳、オーコ-8号墳、富田林市お亀石古墳などの横口式石槨の前面部分は前庭状を呈しており、同類と考えられる。
- (69)——高句麗と日本の関係は長い間、敵対関係にあったが、6世紀代になって高句麗の勢力に陰りが見えはじめてくると朝鮮半島の情勢が変わってくる。551年に漢城が陥落してからは急速に方向転換を行い、570年以降は新羅に対抗するために倭にも使者を送っている。581年隋が成立すると598年には第1回目の征討がはじまり、それを受けて慧慈らを日本に派遣している。642年に高句麗が百済と歴史的な和解を遂げてからは日本との関係はますます密接なものとなる。こうして見ると、畿内と高句麗が敵対することから前庭の受容が無いという仮説を立ててきたが、6世紀後半以降には畿内地方に入っていない不思議は無い。今後の調査で発見されることに期待したい。
- (70)——前掲註(18) 文献
- (71)——前掲註(18) 文献
- (72)——おおまかな試算であるが、筆者は現在以下のように考えている。1万基と言われている上野地域の古墳総数は、近年の調査状況から考えて1万2千基はあったと考えられる。それらの中で、埴輪を有する古墳がおおよそ3千基有り、前期古墳(周溝墓、墳丘墓とよばれているものを含む)が2千基、それ以外のほとんどが終末期古墳と考えられる。
- (73)——前掲註(42) 文献
- (74)——志村哲(1998)『藤岡市の横穴式石室』『群馬県内の横穴式石室(西毛編)』群馬県古墳時代研究会
- (75)——例外として、全羅南道の新徳古墳は北部九州的な中途まで天井石を有するA-5類前庭と考えられる。本古墳は前方後円墳で埴輪型土製品を持ち、九州地方からの逆輸入が指摘されている。白石太郎ほか(1998)『古墳時代の考古学』シンポジウム日本の考古学4 学生社
- (76)——前掲註(2) 文献
- (77)——樋口隆康(1955)「九州古墳墓の性格」『史林』第38巻5号 史学研究会
- (78)——白石太郎(1965)「日本における横穴式石室の系譜-横穴式石室の受容に関する一考察-」『先史学研究』5 同志社大学先史学研究
- (79)——樋口隆康氏はあるいは高句麗の可能性も考えていたようである。前掲註(77) 文献
- (80)——永島暉臣慎(1979)「横穴式石室の源流を探る」『日本と朝鮮の古代史』三省堂
- (81)——小田富士雄(1980)「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 学生社
- (82)——柳沢一男(1993)「横穴式石室の導入と系譜」『季刊考古学』第45号 雄山閣
- (83)——新徳古墳例などから考えると、あるいは北部九州地域からの逆輸入の可能性も指摘される。
- (84)——中村亨史(1996)「鬼怒川東岸域の横穴式石室」『研究紀要』4(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (85)——前掲註(56) 文献
- (86)——前掲註(14) 文献
- (87)——前掲註(36) 文献
- (88)——製作者の意図からすると、増設というよりは転用と解釈すべきものであろう。これらは、堅穴系主体部をもつ古式古墳に横穴式石室が転用されるケースに類似した行為と考えられる。
- (89)——前掲註(36) 文献第20図参照。
- (90)——本指摘については白石太郎先生に御教示いただいた。
- (91)——加部二生(1995)「群馬県における奈良・平安時代の墓制について」『東日本における奈良・平安時代の墓制』第5回東日本埋蔵文化財研究会
- (92)——前掲註(91) 文献
- (93)——前掲註(29) 文献
- (94)——横穴式古墳では追葬や墓前祭祀といった後世まで古墳が機能しているケースは日常的である。本来古墳の調査をおこなったら副葬品も含めてすべてこのような作業をおこなうべきであるのが当然であるのに、全く行われていないという現状から考えても、こうした作業をおこなった行為自体を高く評価すべきであると考えている。
- (95)——なお、大江氏は従来あった石室構造論からこれらの土器については別次元の存在理由(別古墳から及ぶとかの可能性)を考慮して、古墳築造年代を次ぎのピークがある7世紀後半としているが、構造論の年代観が全く信用できないことはすでに『奥原古墳群』などで証明済みであり、今後こうした作業の蓄積を積んでいく必要性を痛感する。
- (96)——前掲註(7) 文献
- (97)——小林行雄(1949)「黄泉戸喫(よもつへぐひ)」『考古学集刊』第2冊 東京考古学会
- (98)——白石太郎(1975)「ことどわたし考-横穴式

石室墳の埋葬儀礼をめぐる―『檀原考古学研究所論集―創立35周年記念』吉川弘文館
(99)―前原豊(1992)『後二子古墳・小二子古墳』では前庭部における3ヶ所の焼土と、土師器坏18, 鉢1, 甕1, 鉄器類等の遺物から「黄泉戸喫」に関連した葬送儀礼を行っている」と推定している。これは本文中でも述べ

たとおり、「ヨモツヘグイ」は石室内で行う葬送儀礼に際して用いられた食物を現世人が口にするのを禁じた行為を指すものと考えられ、その食器を外に持ち出したのでは、その後に行われる呪的逃走や「コトドワタシ」などの儀礼に対して矛盾を生じることになる。
(100)―前掲註(7)文献

参考文献(国内の報告書類は割愛した。)

- 吉林省博物館文物工作隊(1977)「吉林集安的两座高句麗墓」『考古』1977年2期
吉林省博物館輯安考古隊(1964)「吉林輯安麻線溝一号壁画墓」『考古』1964年10期
集安県文物保管所(1983)「集安高句麗墓群発掘簡報」『考古』1983年4期
朱栄憲・永島暉臣慎 訳(1972)『高句麗の壁画古墳』学生社
金日成綜合大学編(1985)『五世紀の高句麗文化―東明王陵とその付近の高句麗遺跡―』雄山閣
社会科学院考古学研究所編(1982)『高句麗の文化』同朋社出版
東潮(1993)「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第47集
田村晃一(1982)「高句麗積石塚の構造と分類について」『考古学雑誌』第68巻1号
田村晃一(1984)「高句麗の積石塚の年代と被葬者をめぐる問題について」『青山史学』第8号
網干善教(1984)「切石造横穴式石室に関する序説―その系譜の概観―」『考古学ジャーナル』238
右島和夫(1983)「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談義』12
曹永鉉(1993)「三国時代の横穴式石室墳」『季刊考古学』第45号
長瀬治義(1993)「大型横穴式石室をもつ方墳―岐阜県次郎兵衛塚1号墳―」『季刊考古学』第45号
尾崎喜左雄(1973)「大陸文化の影響と古墳群」『歴史読本』第18巻第9号
和田晴吾(1997)「墓壙と墳丘の出入口―古墳祭祀の復元と発掘調査―」『立命館大学考古学論集』Ⅰ
白石太一郎(1985)「古墳の埋葬施設」『古墳の知識』Ⅰ
福岡教育委員会(1989)『九州における古墳文化と朝鮮半島』学生社

《追記》脱稿後、谷口古墳の前庭実測図が公表されていることを知った。家田淳一(1996)「佐賀県谷口古墳の調査」『4・5世紀日韓考古学』九州考古学会・嶺南考古学会 鋤崎古墳に先行する事例であるとともに、我が国における横穴式石室の初源でもあることから重要である。また、奈良県キトラ古墳の石室壁画星宿図が平壤付近の緯度の天空図と一致することが画像解析により明らかになった。奈良日日新聞編(1998)「キトラの星宿はピョンヤンの空」『古代研究』創刊号 同古墳の築造にあたって高句麗の技術者が星宿図を持ち込んだか、高句麗の技術者自身が描いた可能性もあるとしている。いずれにしても大和中枢部の終末期古墳において高句麗の造墓技術者が関与した可能性を示す事例として注目される。

(国立歴史民俗博物館共同研究員)

On the Frontal Platform of Corridor-Style Stone Chambers: Origin and Development

KABE, Nitaka

A frontal platform structure of the tunnel burial chamber was widely constructed during the final Kofun period in Gunma prefecture. The traditional view accounts that this platform structure was autochthonously developed at the end of the Kofun period in the Gunma region. However, recent archaeological surveys reveal that it is distributed over a wide geographic area throughout Japan. Moreover, its origin may go back to the beginning of the Kofun period in the Kōkuri state of the Korean peninsula.

The royal graves equipped with the frontal platforms have been built in the Kōkuri state, and their construction continued up to the end of the eighth century in the state of Bokkai. When the tunnel burial chambers were first introduced to northern Kyushu in Japan, some burials were made in this Kōkuri style. This specific burial structure has not been found in the other Korean states, such as the Kudara, the Shiragi nor the Kaya. Therefore, it is safe to say that these early tunnel burial chambers in Japan developed under the influence of the Kōkuri state.

Although the tunnel burial chambers with frontal platforms gradually spread into other regions of Japan, they had never come into the Yamato region. This is because the powerful clans in the Yamato region had an alliance with the Kudara state, which was against the Kōkuri state. This political climate inhibited the adoption of the Kōkuri style burials in the Yamato region. In the Kyushu region, on the other hand, the fan-shaped frontal platforms were introduced without resistance. And the tunnel burial chambers with variably modified entrance corridors began to diffuse over the other areas of Japan from Kyushu.

The adoption of burial structures from the Korean state has occurred at multiple times through a different route. In the Mino and the Kouzuke regions, the platform structure was first introduced in the sixth century from a route other than the Kyushu, and flourished thereafter. In the Kouzuke region, more than 3,000 burial mounds with frontal platforms were constructed in the seventh century, when the haniwa rituals had already been abandoned. These frontal platforms were possibly made for the internment ritual. As the Yamato state extended its political boundary, the mound builders in the Kouzuke region moved into northern Japan, where they constructed the burials with a similar structure.
